

翻 訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』 翻訳と注釈 (4)

中 沢 敦 夫

富山大学人文科学研究第 79 号抜刷

2023年8月

翻 訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈(4)

中 沢 敦 夫

【ポロヴェツ人の来襲。諸公連合軍はアリタ川の合戦で敗北する：1068年】 [№ 188]
6576(1068)年

異族たち(иноплеменници)がルーシの地に〔攻めて〕来た¹⁾。多数のポロヴェツ人(половци)だった²⁾。イジャスラフ[B]が、そしてスヴァトスラフ[C]とフセヴォロド[D]は、アリタ川³⁾(Альто)まで出撃してかれらに対抗した⁴⁾。夜になって、〔双方は〕相対して攻め合いを始めた。われらの罪ゆえに、神がわれらに対して異教徒たち(поганья)を差し向けたのである⁵⁾。ルーシ諸公は逃げ出した。ポロヴェツ人はかれらを⁶⁾打ち負かした。

〔神の怒りがあった。ポロヴェツ人が来た。そして、ルーシ人の地を打ち負かした。〕⁷⁾

1) 来襲の時期は明記されていないが、*ПВЛ*1107年記事の記されたポロヴェツ人首長ボニャクのペレヤスラヴリへの来襲〔ロシア原初年代記：304頁〕と同様の来襲だったと仮定すると、5月頃だった可能性がある。なおフロヤノフは「初秋」(ранней осенью)のこと〔Фроянов 2012: С. 135〕としているが根拠は示されていない。

2) この多数のポロヴェツ軍(おそらく部族連合軍)は、アリタ川の勝利ののち、さらにチェルニゴフおよびキエフ公領内へと攻め寄せ、この中でも、ポロヴェツ候(シャルーカン?)が指揮する部族軍がチェルニゴフ方面へと向かい、その軍勢は1万2千人だと記されている[№ 192]。キエフ方面へ向かった部族軍もいたことを勘案すると、ルーシに来襲したポロヴェツ軍の総勢は3万人程度はいたと想定される。

3) 「アリタ川」は城市ペレヤスラヴリ近郊を流れドニエプル川に注ぐ、現在のイリティツヤ川(Льтиця)のこと〔ノヴゴロド第一年代記3：注35〕。対峙した地点は記されていないが、最上流の地点なら、キエフから55kmほどしか離れていない。ポロヴェツ軍はルーシ領内の奥まで攻め入ったことになる。

4) 三人の公が「出撃して〔ポロヴェツ人に〕対抗した」(изидоша противу имь)とは、全軍を率いて川を挟んで対陣し、自分たちの兵力を誇示し、相手の兵力を探りながら、それ以上攻め込ませないために、威嚇もしくは貢物の支払いなど和議交渉を行うこと。この場合は、おそらく圧倒的な兵力の差があったために、和議どころではなく、その夜にはポロヴェツ人が一気に渡河して、攻め込んだということだろう。

5) 「われらの罪ゆえに」以下の文は、次の教訓[№ 189]の最初の文とほぼ同義の内容であり、教訓の編者によってこの箇所へ挿入されたことが想定される〔Шахматов 1940: С. 104〕。

6) 「かれらを打ち負かした」(побѣдиша их)の「かれらを」(их)は*Км*の固有読み。*Ак*、*Бр*、*Т*および*ПВЛ*諸写本にはない。*Км*の編者が動詞の補語を付加したものだろう。

7) 対応する*НІ-С*原文はГнѣвъ Божии бысть. Придоша половци и побѣдиша русьскую землю. で、「神の怒り」については、次の「教訓」[№ 189]の冒頭の語を採り、補語*русьскую землю*を補って記事を作ったもの。

【神の罰についての教訓（1）】⁸⁾ [№ 189]

なぜなら、神は自身の怒りによって [187] 異教徒の⁹⁾ 異族たちを〔この〕地に導き入れるのだから。かれら〔その地の人々〕はこのように壊滅されてはじめて、神のことを想起するのである。内紛の戦争¹⁰⁾ (усобная же рать) は、悪魔のそそのかしによる (от сважения диаволя) ものである。神は人間に悪ではなく、幸い (блага) を望んでいる。一方悪魔は、悪しき殺人と流血を喜び¹¹⁾、諍い、妬み、兄弟間の憎しみ、中傷を引き起こそうとする¹²⁾。

誰かの地¹³⁾ が罪を犯したならば、神は死によって罰を下す。あるいは飢えによって、あるい

8) 1068年記事のこの部分 ([№ 189–190]) は、研究史の上では、「神の罰についての教訓」(Почуение о казнях Божиих) と呼ばれている。シャフマトフによれば、この「教訓」は、アリタ川の戦いの敗戦後に、キエフで社会不安が起こったときに、それを受けて独立に書かれた文書であり、その後、年代記の記事の中に挿入されたとしている。15世紀の写本が、この文書を洞窟修道院のフェオドーシイに帰していることから、シャフマトフは、年代記が編集されていた修道院の院長だったフェオドーシイの作としている。[Шахматов 1940: С. 109]。他方で、チャゴヴェツ [Чаговец 1901: С. 84-126] など、フェオドーシイとする作者判定に異を唱える立場の研究者たちもいる。

典拠研究によれば、「教訓」は、金口イオアン〔聖ヨアンネス・クリュソストモス〕(Иоанн Златоуст) の作で10世紀ブルガリアのシメオン帝の編纂と伝えられている訓話集「ズラトストルイ」(Златоструй) に収録されている「早魃と神の罰について訓話」(Слово о ведре и о казнях Божиих) を主な典拠（以下〈典拠文献〉）としており、語や句の部分的な改変はあるものの、ほぼその引用である [Срезневский Сведения 1867: XXIV, С. 34-43][Шахматов 1940: С. 104-111][Милтенев 2017: С. 225-228]。ただし、本記事には、〈典拠文献〉をほぼ忠実に引用またはパラフレーズしている部分 [№ 189] と、編者にとって身近な異教的俗習についてもっばら書いている部分 [№ 190] があり、内容や性格がやや異なるため小見出しで分けて示した。〈典拠文献〉のテキストについては、[Милтенев 2017: С. 243-251] を参照。

なお、НСГ(НКІ, СІ, Н4) の諸年代記は、この「教訓」は含んでおらず、[№ 188] のあとは [№ 191] につながっている。

9) НІ-М 全写本 (Км, Ак, Бр) は Наводит бо Богъ поганья, по гнѣву своему, иноплеменники. だが、ПВЛ (Ин, Лер) は Наводит бо Богъ, по гнѣву своему, иноплеменники. となっている。この異同については、本教訓が最初に書かれたときには、Наводит бо Богъ поганья, по гнѣву своему, であつたのが、教訓を年代記に組み込むときに編者（上注5）が、[№ 188] の初めにある иноплеменники の語を句末に挿入し（その結果不自然な語順と補語のダブリが生じた）、この読みが НІ-М で保持された。他方、ПВЛ ではその編集段階で（おそらくダブリを訂正するために）поганья の方を削除した。以上のようなテキストの変遷が考えられるだろう。

10) 直接の言及はないが、この「内紛の戦争」は、1067年のフセスラフ [L] との戦争 [№ 185] やその直後のネミガ川の戦い [№ 186] を参照しているだろう。

11) ここでも、人間たちの殺し合いを見て「悪魔が喜ぶ」というモチーフ（[ノヴゴロド第一年代記3:注12] 参照）が使われている。

12) 教訓 [№ 189] の序文にあたる、「なぜなら」から始まるこの段落の記述は、〈典拠文献〉にはなく、文献の引用者（編者）の手によるものである。

13) НІ-М 全写本 は земли согрѣшивши коси любо だが、ПВЛ (Ин, Лер) は земли же согрѣшивши которѣи любо の異同がある。

は異教徒を導入することによって¹⁴⁾,あるいは旱魃によって(ведромь),あるいは害虫によって,あるいは他の罰によって¹⁵⁾。

〈もし, 神がそのように生きよと命ずるように, われらが悔い改めをなさないならば¹⁶⁾〉。

〔神〕 預言者を通して, われらにこう言っている。〈おまえたちのすべての心をもってわたしに立ち帰れ。断食し, 祈り¹⁷⁾, 泣き悲しむことによって¹⁸⁾〉。このようにわれらがなすならば, われらはすべての罪からの許しを得るだろう。

〈ところが, われらは悪しきことに立ち戻っている。あたかも, 豚が罪の泥の中で転げ回っている¹⁹⁾ ように²⁰⁾〉。

それゆえに²¹⁾, 〔神〕 預言者を通して, われらに対してこう言っている。「〈わたしは知っている。お前が頑固で, 鉄の首筋を持つことを²²⁾ 〉 それゆえに, 〈わたしはお前たちに雨を拒んだ。ある地域には雨を降らせ, 他〔の地域〕には雨を降らせなかった。乾燥すると²³⁾, 〈わたしは酷暑と様々な懲罰によってお前たちを苛んだ。だがやはり, お前たちはわたしに帰らなかった²⁴⁾〉。〈それゆえに, お前たちの葡萄畑, お前たちのいちじく, 畑とお前たちの広葉樹林を枯

14) 〈典拠文献〉の ратными напастями (軍隊が襲うことによって) の表現を「異教徒を導き入れること」(наведением поганых) に変更してあるのは, 本教訓の著者(編者)が冒頭の表現(上注9)を参照したことによるだろう。

15) この段落では, 「死によって」(смертью)と「害虫によって」(гусницею)は〈典拠文献〉にない。これは編者による補筆である。なお, гусница の語は, 『ヨエル書』1:4, 『アモス書』4:9などに κβιλη の訳語として使われており, ともに作物をあらす害虫(イナゴの一種?)の意味である。これが, 翻訳教父文献などを通じて広がったものを編者が採ったのではないか。

16) この段落は, 〈典拠文献〉を縮約して引用したもの。

17) この「祈りによって」(молитвою)の語は *HI-M* 全写本にあるが, *ПВЛ* (*Ин, Лер*)と〈典拠文献〉および『ヨエル書』(次注)にはない。明らかに *HI-M* 編集段階での追加である。

18) 『ヨエル書』2:12を改変した引用。なお, 教訓の『旧約聖書』(預言書)との対応(引用)部分は, 教訓の作者(編者)による引用ではなく, 全て〈典拠文献〉を経由した引用である。

19) *HI-M* 全写本は валяющихся だが, *ПВЛ* (*Ин, Лер*)では присно валяющеся (永遠に転げ回る)と下線の語がある。〈典拠文献〉の対応箇所は присно валяющеся であることから, *HI-M* 編集段階で присно の語が削除されたことがわかる。

20) この段落は, 〈典拠文献〉を縮約して引用したもの。

21) この「それゆえに」(тъмъ же)以降, 下注39の箇所まで, *Ак, Бр* はテキストが欠失している。*Ак* ではこの箇所まで写本の紙葉(59 об.) いっぱいに書かれていることから, 次の紙葉一枚が脱落したことによるテキスト欠失と考えられる(例えば, *Ак* の紙葉 л. 49 には 620 文字(143 語)が書かれている。テキスト欠失部分は *Км* で判断すると, 1252 文字(261 語)である。つまり, *Ак* の紙葉の表と裏に相当する量のテキストが欠失していることがわかる)。なお, *Бр* ではテキスト欠失箇所はそのままつなげて書かれている。

22) 〈典拠文献〉の忠実な引用。『イザヤ書』48:4 に対応している。

23) 〈典拠文献〉の忠実な引用。『アモス書』4:7 に対応している。

24) 〈典拠文献〉のほぼ忠実な引用。

らした。そう主は言う。わたしはお前たちの悪行を根絶やしにできなかった²⁵⁾。〈わたしは、お前たちに様々な不幸と病気を、重篤な死を送った。家畜に自分の懲罰を送った。だがやはり、お前たちはわたしに帰らずに、《われらは男である》²⁶⁾ と言った²⁷⁾」

「〈何時になったら、お前たちはお前たちの悪行に飽き足りるようになるのか？ お前たちはわたしの道を踏み外した²⁸⁾。〈お前たちは多くの者を惑わした²⁹⁾ 〈それゆえに、わたしは、直ちに証人になる。敵対する者たちに対して、姦淫する者たちに対して、わたしの名にかけて偽り誓う者に対して、使用人から賃金を奪う者に対して、孤児と寡婦を虐げる者たちに対して、裁きを歪める者たちに対して³⁰⁾。〈どうして、お前たちはお前たちの罪を自制しようとせず、わたしの法を踏み外すのか、これ〔法〕を守らないのか？ わたしに帰れ、そうすれば、わたしもお前たちに帰ろう³¹⁾」と主は言う。「〈わたしはお前たちのために天の窓を開けよう。自らの怒りをお前たちから逸らそう。お前たちにすべてのものが豊かになるまで。〔188〕 そうすれば、お前たちの葡萄畑も、畑も枯れ果てることはないであろう。しかし、お前たちはわたしにひどい言葉を投げつけた³²⁾。『神に仕えることは虚しい』と言ったのだ³³⁾ 〉〈そのことによって、〔お前たちの〕口はわたしを敬っているが、お前たちの心は遠く離れているのだ³⁴⁾』。主はこう言っている。「〈このために、われらは〔神に〕願っても、受け取ることができないのである³⁵⁾」。

〔神は〕言った。「〈お前たちがわたしを呼んでも、わたしはお前たちの〔言うことを〕聞かないだろう。お前たちが探し求めても、わたしを見出すことはできないだろう³⁶⁾ 〉〔人々は〕

25) 〈典拠文献〉のほぼ忠実な引用。部分的に『アモス書』4:9からの引用がある

26) 「われらは男である」は *Км мужа есмя мы* の訳だが (*Ак, Бр* はテキスト欠失), *ПВЛ* では *Ил мужаймься, Лвр мужасмься* となっている。〈典拠文献〉の対応箇所が *мужаймься* であることから、*ПВЛ* が本来の読みであり、「われらは大丈夫だ」の訳が本来である。この句はおそらく『エレミア書』18:12を参照しており、神の罰に対して人間たちが我を張っている言葉と解釈できる。

27) 〈典拠文献〉のほぼ忠実な引用。部分的に『マラキ書』4:10からの引用がある。

28) 〈典拠文献〉の部分的な引用。「お前たちはわたしの道を踏み外した」の句は『マラキ書』2:8からの引用。

29) 〈典拠文献〉の忠実な引用。『シラ書』32:17を参照している可能性がある。

30) 〈典拠文献〉の忠実な引用。『マラキ書』3:5を参照している。

31) 〈典拠文献〉の忠実な引用。『マラキ書』3:6-7を参照している。

32) 「お前たちはわたしに、ひどい言葉を投げつけた」は、底本 *Км вы стяжасте на мя словеса тяжка* だが、*Ил, Лвр* は *вы отяжасте на мя словеса ваша* であり、これは〈典拠文献〉の、*вы отяжасте къ мнѣ словеса ваша* にほぼ一致している。*Км* の下線部は編者による解釈的な固有読みである。

33) 〈典拠文献〉のほぼ忠実な引用。『マラキ書』3:10, 14を参照している。

34) 〈典拠文献〉の忠実な引用。『イザヤ書』29:13を参照している。

35) 〈典拠文献〉の忠実な引用。

36) 〈典拠文献〉および『箴言』1:28からの忠実な引用。

わたしの道を歩もうとしなかったのだから³⁷⁾」

〈このために、天は閉ざされる。あるいは、〔天は〕ひどく開き、雨の代わりに〔雹を〕降らせたり³⁸⁾、あるいは、寒気によって³⁹⁾ 果実を傷めたり、酷暑によって大地を疲弊させるだろう。〔これは〕われらの悪行のためである⁴⁰⁾。〉

〈もしわれらが、自らの悪行を悔い改めるならば、神は自らの子供たちになすように、われらにすべての許しを与えるだろう⁴¹⁾。〉

〈そして、〔神は〕われらに、早い雨、遅い雨を与える。そして、われらの小麦の麦打ち場は満たされ、酒とオリーブ油が流れ出すだろう。われら〔神のこと〕は、幾年もの間の〔損害の〕代償を与える。イナゴや甲虫や害虫が食べてしまったものに対する〔代償を〕。わたしがお前たちに派遣する、わたしの力〔天軍〕は大いなるものである。以上のように全能の主は言った⁴²⁾。〉

これらのことを聞いて、われらは善を求めよう。〈お前たちは裁きを求め、辱しめられた者たちを救え⁴³⁾。われらは、悔い改めを行おう。〈悪に対して悪をもって報いるのではなく、中傷に対して中傷をもって報いるのではなく⁴⁴⁾。〈われらは、愛をもってわれらの主なる神に身を捧げよう。齋（ものいみ）と号泣と涙をもってあらゆる罪を洗い流しながら⁴⁵⁾。〉

【神の懲罰についての訓話2：われらの周りにおける様々な悪習について】 [№ 190]

言葉ではキリスト教徒 (крестиянѣ) と自称しながら、異教徒のように (поганьскы) 生きている者たちがいる⁴⁶⁾。

37) 〈典拠文献〉の部分的な引用。

38) *Км* в дождя мѣсто пуцаеть *да*г, *Ип* градъ в дождя мѣсто пуцаия; *Лер* градъ въ дождя мѣсто пуская と補語 градъ (雹) が示されている。*Км* の読みは градъ の脱落と判断して、訳では補った。

39) 上注 21 の箇所からこの箇所まで、*Ак*, *Бр* ではテキストが欠失している。

40) 〈典拠文献〉の忠実な引用。

41) 〈典拠文献〉の忠実な引用。

42) 〈典拠文献〉のほぼ忠実な引用。『ヨエル書』2:23-25 を参照している。

43) 『イザヤ書』1:17 からの引用。

44) 〈典拠文献〉のほぼ忠実な引用。『ペトロの手紙1』3:9 を参照している。

45) 〈典拠文献〉の忠実な引用。

46) この箇所から教訓 [№ 190] の最後まで、編者は自分たちの「異教徒のような」現実についてもっばら叙述しており、〈典拠文献〉(上注 8) の引用・参照は [№ 189] と比べるとごくわずかである。とくに、予兆や占いについての次の段落の記述は、〈典拠文献〉から離れており、編者のオリジナルな見解の表明と考えられる。

見よ、もしわれらが出遭いを⁴⁷⁾信じ⁴⁸⁾ているとしたら、われらは異教徒として生きていない[と言える]だろうか？ もし、誰かが修道士と〈出遭った〉(усрящеть)とき、あるいは、はぐれた獣⁴⁹⁾や豚〔に出遭ったとき〕引き返したとする⁵⁰⁾。その場合、異教徒のようではないのか？⁵¹⁾ 見よ、〔人々は〕悪魔のそそのかしによって、占い⁵²⁾(кобь)をおこなっている⁵³⁾のである。また、他の者たちは、くしゃみ〔の効用を〕信じている。それが頭健康によいというのである⁵⁴⁾。

悪魔はこれらによって惑わし(льстить)、またその他の習慣によって(нравы)、あらゆる惑

47) 「出遭いを」は、*Н1-М*は *Км, Ак, Бр* въ усрящу(ю), *Т* въ усрящу だが、*Ип* въ стрѣчю, *Лер* усрѣсти となっている。

48) 「出遭いを信じる」(в усрящу вѣруем)とは、外出時に出遭ったモノによって、未来の吉凶を占ったり縁起を担ぐ俗信(出遭いの予兆 приметы при встрече)のこと。なお、*Км*は вѣруют だが、*Ак, Бр* вѣруемъ で、主文の動詞が живемъ であることから、後者が本来の読みだろう。なお、*Ип, Лер*では当該箇所は вѣрующе になっている。

49) 「はぐれた獣」の原語は *Н1-М, ПВЛ* ともに единиць だが、他に用例がなく解釈が難しい。『詩篇』79:14の уединенный дивий (μονιὸς ἄγριος) (はぐれた野獣)の表現を踏まえているか。『古ルーシロシア語辞典』の ѓединць の語釈には「群れから離れたイノシシ(カбан) (?)」[СДРЯ Т. III. С. 202]とある。

50) これに類した〈出遭いの予兆〉で後代に伝わっているものとしては、例えばダーリの諺集にある、次のような諺を参照。「Девка с полными ведрами, жид, волк, медведь — добрая встреча; пустые ведра, поп, монах, лиса, заяц, белка — к худу» [Даль 1984, Т. 2: С. 253]。

51) 『ニーコン年代記』の対応部分には、16世紀に残っていた習俗を付け加えた、次のような記述がある。「修道士や修道女に出遭ったり、司祭、女、はぐれた動物、豚、額に白斑のある馬に〔出遭った〕ときには、唾を吐いて戻ることがあるが、これは異教ではないのか」(Аще бо кто усрящеть инока, или инокиню, или попа, или жену, или единицу, или свинью, или конь лысь, то плюють и возвращаются назадъ. Не погански ли се есть?) [ПСРЛ Т.9: Никоновская летопись. С. 95]。

52) 「占い」と訳した кобь は、古いスラブ語に起源をもっており、古代教会スラブ語、ロシア古語では、予兆やそれを知る行為、とくに鳥の飛びかたや鳴き声で占ったり、偶然に出遭ったモノで占うことを意味し、民間でも使われていた。ここでは〈出遭いの予兆〉(上注48)のことを言っている。語源的には、「ぶら下がっているもの」から、「偶然に引っ掛ける、出遭う」の意味が派生したと推定されている [ЭССЯ Вып. 10: С. 101, *кобь]

53) 「おこなっている」にあたる動詞は、*Н1-М* творять; *ПВЛ* держать と異同がある。どちらが本来の読みであるかは定めがたい。

54) これが現在の習俗に残っている例としては、人がくしゃみをしたときに、будьте здоровы! とまわりの者が言うまじないがあるだろう。[Михельсон 2006: С. 62, № 385]を参照。

わしによって (лестьми) [惑わす]。[それは]⁵⁵⁾ ラッパによって (трубами),⁵⁶⁾ グースリによって (гуслями), ルサーリイ⁵⁷⁾ (русальями) によって, われらを神から引き離す⁵⁸⁾ (пребавляя) のである。

われらは見ているのだから。遊びの場が踏み固められ, そこに数多くの人々がいることを。
[189] 悪魔によって考えつかれた醜態をさらしていることを, 他方, 教会は立っている。祈りの時が来ても, 教会を顧みる者は僅かしかいないのである⁵⁹⁾。

⁶⁰⁾ まさにそれゆえに, われらは罰を受ける, **罰をわれらの罪ゆえに, あらゆる, 神から**。そして, 神の命令によって軍隊の来襲 (нахождение ратных) を受ける⁶¹⁾。

55) ここで,〈典拠文献〉[Милтенов 2017: С. 250, № 37]において悪魔 (典拠では сотана, бѣси) による「あらゆる惑わし」(всякими лестьми)として列挙されているのは, сопѣльми и скомрахи. и инѣми играми влѣкѣи к собѣ, гусльми и свирѣльми. плясании и смѣхы пустошными. лжами срящами. влѣшбами клеветами, татбами. разбой блудомъ и пияством. завистьми враждами と多数あるが, 本教訓の作者 (编者) は, 下線の「スコモローフ」と「グースリ」を採っているだけで, さらに〈典拠文献〉にはない трубами (ラッパ) と русальями (ルサーリイ) を付け加えている。これは, 作者 (编者) が実見している, ルーシ人たちの異教的習俗を勘案した選択によるものだろう。グースリ (弦楽器) (гусли) を残し, ラッパ (管楽器) (трубы) を加えたのは, 当時のスコモローヒ (放浪芸人) の典型的な楽器だったからか。

56) *ПВЛ (Ип, Лвр)* では「ラッパによって」(трубами) のあとに, и скомрохы (スコモローヒによって) の語があるが, *НІ-М* 全写本にはない。〈典拠文献〉(前注)には, скомрахи の語があることから, *ПВЛ* が本来の読みで, *НІ-М* 编者は何らかの理由で и скомрохы を削除したことが分かる。

57) 「ルサーリイ」(русалии) は编者による挿入であることから, ロシア (スラブ) 独特の習俗であることがわかる。ただし語そのものはギリシア語に発している。これは, 教会の五旬祭 (Пятидесятница) (移動祭日でほぼ5月にあたる) の翌日の聖神祭 (Духов недь) から一週間のあいだは民間で春を送る祭りにあたり, カーニバル的などんちゃん騒ぎが行われる慣習があった。その祭り騒ぎのことを全体として「ルサーリイ」と複数形で呼んでいるのだろう。スラブ人の在来信仰に発する死者追悼祭とかかわり, ルサールカ, ヤリーロ, コストロマーなどと呼ばれる神格の葬式が行われた [佐野 2008: 232-233, 661 頁]。

58) 「引き離す」の原語は *НІ-М* は пребавляя だが, *ПВЛ (Ип, Лвр)* では превабляя であり, 後者が正しい綴り。前者は誤った綴りが *НІ-М* の全写本に受け継がれたものだろう。

59) この段落は, 〈典拠文献〉では, церкви стоят заростыше, а игрища утлачена грѣховными плясы (教会には雑草が生え, 遊びの場が罪に満ちた踊りで踏み固められ) となっている [Милтенов 2017: С. 245, № 14]。编者はこれを切り縮めた上で補筆をしているため, 文意が分かり難くなっている。

60) この段落は, [№ 188] の挿入文 (上注9) および [№ 189] 冒頭の文の内容を繰り返しており, 「教訓」[№ 189-190] を締めくくっている。

61) この段落の *НІ-М* の原文は Да сего ради казни преемлемъ, казни грѣх ради нашихъ от Бога всякыя, и нахождение ратных по Божию повелѣнию приемлем だが, *ПВЛ* では下線の句が文末に置かれている。構文的には *ПВЛ* が自然であり, 本来の読みで, *НІ-М* は改変された読みと考えられる。

【ポロヴェツ討伐遠征から逃げ帰ったキエフ人たちが騒乱を起こし、フセスラフを牢舎から解放する。イジャスラフ [B] とフセヴォロド [D] はキエフから逃げ出す：1068年9月15日】 [№ 191]

われらは〔また〕以前の話に戻ろう⁶²⁾。

再び⁶³⁾、イジャスラフ [B] はフセヴォロド [D] とともにキエフに逃げ込んだ。スヴァトスラフ [C] はチェルニゴフに〔逃げた〕。

キエフの人々⁶⁴⁾はキエフへと駆け込んで来ると、市場⁶⁵⁾ (Торговище) で民会 (вѣче) を開いた。公〔イジャスラフ〕のもとに〔使者を〕遣って、こう言った。「見よ、ポロヴェツ人が地上にまき散らされました⁶⁶⁾。公よ、武器と馬を下さい。われらは更にかれら〔ポロヴェツ人〕と戦います⁶⁷⁾」。イジャスラフ [B] はこれを聞き入れなかった⁶⁸⁾。かれの〔イジャスラフの〕家来た

62) [№ 188] の続きに戻るとのこと。

63) 「再び」 пакы же は、*Км* の固有読みで後代の挿入。

64) 「キエフの人々がキエフへ駆け込んで来た」 (люди киевстѣи прибѣгоша Киеву) とは、文脈から見る限り、キエフの市民が民兵 (вои) としてアリタ川まで出陣し、敗走してキエフへ逃げて来た者たちということだろう。これについては、フロヤノフも諸説を検討した上で同様にキエフ市民およびキエフ地方 (公や貴族の所領地 (волость)) の農民層であるとの見解を示している [Фроянов 2012: С. 135-137]。

65) この「市場」 (Торговище) は、キエフの下町 (Подол) にあった広場のこと。現在のコントラクト広場 (Контрактова площа) の場所に相当する。文字通り、輸出入品の取引 (торг) が行われていた場所であり、そのことから騒乱の指導者、参加者は商人が主体であったことが推測できる。

66) 「まき散らされる」に当たる語は、*Ак, Бр, Ин, Лвр* рос(с)улися; *Км* розошлѣся と異同があるが、後者が固有読みで、前者が本来の読み。

67) このキエフ人のポロヴェツ人に対する好戦的な姿勢は、例えば、1093年記事のストグナ川の戦いで、キエフ人がウラジーミル・モノマフ [D1] のポロヴェツ人との和議の方針に反対して、「われらは戦いたい。川の向う側へ進もう」 (хочемь ся бити, поступимь на ону сторону рѣуи)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 219] と言って川を渡り、結果的に敗北したエピソードにも見ることができる。

キエフ人にとっては、ポロヴェツ人を押しとどめることができず、キエフ地方まで侵入を許すことは、直接に殺戮や財産 (商品・交易品を含め) 掠奪の被害を受ける恐れがあり、生存にかかわる切実な問題だったのである。そのため、イジャスラフ [B] 等三人の公の、消極的、融和的な方針を容認できずに行動し、それが以下のような騒乱につながったのではないか。

68) イジャスラフが民会の要求を「聞き入れなかった」 (сего не послуша) 理由として、諸研究では、武器・馬を自分に悪意を抱くキエフ民に渡すことで自分が害されることを恐れた、そもそも武器・馬がなかった、などの説が出されているが [Фроянов 2012: С. 153-154]、これは、要求が、イジャスラフの対ポロヴェツ人の消極的、融和の方針 (貢品の提供、捕虜の買い取り、一定の掠奪許容などによる) に合致しなかったと考えればよいのではないか。

ち(люди)は非難し始めた⁶⁹⁾。それは、軍司令官コスニャチ⁷⁰⁾(Коснячь)に対してだった。

〔キエフの人々は〕民会〔の場〕から〔キエフの〕丘へ行き、コスニャチの館⁷¹⁾にやって来た。そして、かれを見つけ出すことができず、ブリャチェスラフの館⁷²⁾のところ(у двора Брючиславля)

69) 「家来たちは非難し始めた」は、*НІ-М* 全写本と *Іп, Рдз* で *начаша людие говорити* (「〔キエフの〕人々が~を中傷し始めた」と解釈できる) だが、*Лер* *начаша люди его корити*; *НКІ* *начаша людие его говорити*; *СІ* *начаша людие его воротити* と *люди/людие его* (かれの家来たち) と読める異読のグループがある。これは、後者(おそらく *Лер*) の読みが本来であり、前者は単語の分綴の誤記が伝わった二次的な読みと考えるべきだろう(逆の誤記は想定し難い)。この異読は、叙述の解釈に大きくかわることから、翻訳では底本(*Км*)ではなく、本来に近い読み(*Лер*)を訳出した。なお、*люди/людие* を民会の参加者のキエフ民として、「〔キエフの〕人々がかれ〔イジャスラフ〕を非難し始めた」とする解釈は、次の *на воеводу...* とのつながりが悪く、無理があるだろう。

ここでは、イジャスラフ公が「武器と馬」(оружие и конь)を与えない理由と責任を、公の配下の者たちは、側近貴族のコスニャチ(次注)に転嫁することで、公に対するキエフ民の直接の追及を免れようとしたと理解することができる。

70) 「コスニャチ」は *НІ-М, Іп* *Коснячь*; *Лер* *Коснячък*、語形の由来については、「末の息子」を意味するスラブ語起源[Баженова 2006: С. 206]、もしくは、ギリシア語 *Κωνσταντίνος* 由来の「コンスタンチン」(Константин)のノヴゴロド方言形の二つの可能性が考えられる。

なお「コスニャチコ」(Коснячко)の名は、『ルーシ法典』(簡素版 *КІТ*) の第 18 条に、法典を制定するために集まった重臣たち(おそらく貴族たち *бояре*) の筆頭者として書かれており(『ノヴゴロド第一年代記 3: 注 218 参照)、「コスニャチ」はこれと同一人物だろう。イジャスラフ公 [В] がキエフの公座にあった時代、公の側近貴族だったと思われ、本記事によればアリタ川への遠征においても軍司令官として市民軍 (*вои*) の指揮を委ねられたと考えられる。

71) この「コスニャチの館」(*дворь Коснячевь; ПВЛ Коснячковь*) のあった正確な場所は不明だが、キエフ民たちは、下町(Подол)の市場(Торговище)からウラジーミル街区を迂回して丘に登った[Закревский 1858: С. 75]と考えられ、その場合ヤロスラフ街区に入ることになるので、この街区にあったのだろう。

なお、フロヤノフは、キエフ民がコスニャチの館に向かったのは、「武器と馬」の供与についての平和的な交渉のためであったとしている[Фроянов 2012: С. 139-140]。

72) この「ブリャチスラフの館」(*двор Брючиславль*) は文脈から見て、コスニャチの館(前注)の近くのヤロスラフ街区内にあったと考えられる。ザクレフスキイは「橋」(下注 75) の近くにと[Закревский Планы: План Старого Киева]、『イパーチイ年代記』のウクライナ語訳者は地下牢の傍らに[Літопис руський, 1989: С. 538]と、それぞれ立地推定している。

「ブリャチスラフ」の名はキエフに捕らえられていたフセスラフ [L] の父親、ブリャチスラフ・イジャスラヴィチ [081] (1044 年没) と関係づけることができ、このブリャチスラフ公がキエフに構えていたポロツク商人のための商館だった可能性が高い。コスニャチを見つけられなかった下町のキエフ民は、ここでキエフ在住のポロツク人(やはり中心は商人たち)と合流することで、フセスラフ [L] の解放と擁立へと行動方針を転換したということではないか(次注および[栗生沢 2015: 799-800 頁][Фроянов 2012: С. 141]参照)。

にとどまって、こう言った。「行って、自分たちの従士たち⁷³⁾を地下牢⁷⁴⁾ (погреб) から救い出そうではないか」。かれらは二手に分かれ、半分は地下牢に向かい、半分は橋⁷⁵⁾を進み始めた⁷⁶⁾。

この〔後者の〕者たちが公の館⁷⁷⁾ (князь двор) に到着した。イジャスラフ [B] は、自分の従士たちとともに〔公の館の〕階上の間⁷⁸⁾ (сѣни) に座っていたとき、下の〔キエフの人々は〕公と言い争いを始めた。公は窓から外を見ており、従士たちは公のそばに立っていると、チューゼン⁷⁹⁾の兄弟トゥークイ⁸⁰⁾ (Тукы, брат Чюдинь) がイジャスラフ [B] に言った。「公よ、人々が

73) 「自分たちの従士たち」(дружина своя) (свояは *Лер, Н1-М, НСГ* の読み, *Рдз, Ин* にはない) は反乱を起こしたキエフ人の発言とすれば奇妙だが、前注で想定したキエフ在住のポロツク商人たちの立場からの言葉と解釈すれば、合理的に理解できる。フセスラフ [L] と二人の息子が捕らえられたとき [№ 187] (次注も参照)、かれらの側近の従士たちも同時に捕らえられ、地下牢に閉じ込められていたことは、十分に想定可能である。「従士たち」(дружина) を、公への反抗のためにすでに捕らえられていたキエフ民とする諸研究の説は、飛躍があり無理な解釈だろう。

74) この「地下牢」(погреб) は、地面を深く掘って上を格子などでふさいだ牢獄を指している。ここにポロツク人、ポロツクの従士たち(前注)が監禁されていたのだろう。ザクレフスキイの地図 [Закревский Планы: План Старого Киева] によれば、この地下牢はヤロスラフ街区の城壁に沿ってあったと思われる。

75) この「橋」(мост) は、ヤロスラフ街区 (Город Ярослав) とウラジーミル街区 (Город Владимира) を結ぶソフィア門 (Софийские ворота) の濠にかかっている橋のこと。群衆の半分は、ヤロスラフ街区からウラジーミル街区へと入ったのである。これは、コスニャチの館で見つからなかったコスニャチ本人を探し出すために、公の館に向かったのかもしれない。

76) 「橋を進み始めた」は *Н1-М* 共通で *поидоша по мосту* だが、*ПВЛ* は全写本で *иде по мосту* (橋を渡っていた) となっている。どちらが本来の読みか定め難い。

77) この館 (двор) は、イジャスラフが配下の従士たちと座して、政策の評議を行ういわば宮廷にあたる場所で、キエフの丘の「ウラジーミル街区」(Город Владимира: Андреевское отделение) にあった [Закревский 1858: С. 226]。

78) 「階上の間」(сѣни) は公や貴族の館 (двор) の二階の屋根付きの回廊形式をもつ中心的な居住空間で、廊下から階段を渡して登れるようになっていた。部屋も廊下も広く、酒宴や会合、協議の場として使われた。

79) 「チューゼン」(Чюдинь) については、本年代記ですでに二回言及され [ノヴゴロド第一年代記 (3): 注 221]、また、*ПВЛ* 1072 記事にも言及がある。イジャスラフの側近、重臣貴族であろう。

80) 「トゥークイ」(Тукы) は、チューゼン (上注) の兄弟として言及されていることから、やはり同様にイジャスラフ [B] の側近貴族だったと推定される。1078 年 8 月にオレーグ [C4] とポロヴェツ人の軍がフセヴォロド [D] に勝利したソジツァ (Сожица) (チェルニゴフ郊外、もしくはオルジツァ (Оржица) 川の誤記) の戦いで、フセヴォロド側の戦死者として年代記に言及がある [ПСРЛ Т. 1: Стб. 200]。これは、イジャスラフ [B] がフセヴォロドへの援軍の軍司令官として、トゥークイを派遣したものであろう。

騒ぎ出した⁸¹⁾のが見えませんか？ フセスラフ [L] のもとに使者⁸²⁾(сол)を遣って、監視するようにして下さい。

見よ、かれがこう言ったとき、人々の他の〔前者の〕半分が、地下牢(погреб)から〔公の館へと〕やって来た。地下牢を開いたのである。

従士たちは公に言った。「見よ、これは悪事⁸³⁾(зло)です。フセスラフ [L] に人を遣って、〔かれを牢舎の〕窓際に呼び寄せて⁸⁴⁾、かれを長剣で刺させてください」。しかし、公〔イジャスラフ〕はこれを聞き入れなかった。

人々は叫び声をあげて、フセスラフ [L] の牢舎⁸⁵⁾(к порубу Всеславлю)へと向かった。イジャスラフ [B] はこれを見て、フセヴォロド [D] とともに公の館から逃げ出した。⁸⁶⁾

[同じ年、キエフ人は牢舎を打ち壊してフセスラフを出した⁸⁷⁾

〔キエフの人々は〕公の館を略奪した。数知れないほど多くの金と銀を、また金銭や毛皮

81) 「騒ぎ出した」は *Км возлилися суть; Ак, Бр възлѣгли; ПВЛ, НК1, Н4 възвыли, С1 възвысися* と異同がある。*възлили* では意味が通らないので、*Км* は固有に改変したと思われる（「ごちゃまぜになる」くらいの意味?）が、やはり無理があり、*ПВЛ* の読みが本来と考えられる。

82) 「使者を遣って」は *Км пошли соль* だが、*Ак, Бр, ПВЛ, НСГ* は *посли* だけである。*Км* では、前注と同じ手法で、解釈的な改変を加えたと考えられる。

83) この「悪事」(зло)は、1069年記事の冒頭にあるキエフ民がフセヴォロド [D] とスヴァトスラフ [C] に使者を派遣して伝えた言葉 *мы уже зло створилѣ есмы, князя своего прогнавшѣ* を勘案すると、キエフ公を追放する行為のことを指しているのではないか。

84) 「窓際に呼び寄せて」の *даждь призвавшѣ къ оконцю* の読み (*Н1-М* 共通) は、*ПВЛ* の *Лер, Рдз, Хлб* では *призвавшѣ лестию* (欺いて呼び寄せて) となっている。おそらく、*лестию* があるのが本来の読みで、*Н1-М* の読みは、*Ип* と共通の、*лестию* が欠落した写本に拠ったためだろう。

85) 「フセスラフの牢舎」(поруб Всеславль) は、地下牢(погреб) (上注 74) とは別の場所にあり、1067年記事の末尾で、フセスラフ [L] とその二人の息子が「牢舎に入れられ」(*всади... в порубѣ*) たとする。木造の掘っ立て小屋のこと。仲間を地下牢から解放して、ともに公の館近くまで来た民衆が、さらに「牢舎」に向かったとすれば、「牢舎」は公の館の近くのウラジーミル街区にあったと考えられる。

86) この位置に、*Лер* では、*людѣ же высѣкоша Всеслава ис поруба, въ 15 день семтября, и прославиша (Ип, НК1 поставиша) и' средѣ двора* (〔キエフの〕人々は牢舎を叩き壊してフセスラフを〔解放した〕、9月15日だった。かれらは館の真ん中で〔フセスラフ〕を称賛した(公として据えた)という文があるが、*Н1-М* ではそっくり抜けている。重要な情報であることから、意図的な削除は考え難い。この箇所ので *Н1-М* の句のつながりは、*съ двора князя/князи* と語結合が不自然である(*съ дворя княжа* となるべき) ことから、写本伝播の初期段階での筆写の際の不注意による脱落(おそらく行を飛ばした)が、*Н1-М* の全写本に伝わったものと考えられる。

87) *Н1-С* 原文は *Въ то же лѣто высѣкоша кыянѣ Всѣслава ис поруба*。*Н1-М* では欠落した部分(前注 86)を *Н1-С* では、抄録して記事に採っていることが分かる。

を⁸⁸⁾ 獲った⁸⁹⁾。

イジャスラフ [B] はリヤヒ人〔ポーランド人〕のもとへ逃げた⁹⁰⁾。

[一方、イジャスラフ [B] はリヤヒ人のもとへ逃げた]

【ポロヴェツ人のチェルニゴフの地での掠奪。スヴァトスラフの防衛戦（スノフ川の戦い）：1068年10月～11月】 [№ 192]

その後、ポロヴェツ人がルーシの地を掠奪していたとき、スヴァトスラフ [C] はチェルニゴフにいた。ポロヴェツ人がチェルニゴフの近くで掠奪するようになると、スヴァトスラフ [C] は、幾ばくかの従士たちを集めて、かれら〔ポロヴェツ人〕を討つべくスノフスク⁹¹⁾ (Сновъск) に向けて〔チェルニゴフ城市から〕出撃した。

ポロヴェツ人は、進んで来る軍兵たち見つけると、**軍兵**を⁹²⁾ 対抗させた。[190] スヴァトスラフ [C] はかれらの数が多いのを見て、自分の従士たちにこう言った。「さあ頑張ろう。われらにはもう身を隠すべき場所はないのだから」。そして、**かれらを打って**⁹³⁾、スヴァトスラフ [C] は3千で〔敵を〕打ち負かした。ポロヴェツ人は1万2千だった。このようにして〔ポロヴェ

88) 「金銭と毛皮」の原文は и кунами и скорою で、куна は語源的にはテン（貂）(куница) の毛皮だが、それが交易の通貨単位となったもので、ここでは、ディルハム銀貨のような金銭を指している可能性が高い〔ノヴゴロド第一年代記(1):注436〕。それに対して、скора は商品としての様々な獣の毛皮のこと。二つともビザンツなどとの交易のために、公の館に保管されていたものだろう。

なお、скорою は *HI-M* 全写本と *Ип, Хлб* の読みだが、*ПВЛ* の *Лвр, Рдз* では бѣлью となっている。この、бель は「リス毛皮」から発して、毛皮全般の意味、もしくは、куна に対して安価な金銭の意味で用いられているとも考えられる〔ノヴゴロド第一年代記(1):注100〕。ただし、скорою と бѣлью のどちらが本来の読みであるかは定めがたい。

89) 「獲った」(поимаша) は、*HI-M* 共通だが、*ПВЛ* にはない。множество злата поимаша и серебра と不自然な位置にあることから、この語は後代の挿入と考えられる。

90) イジャスラフがポーランドへ亡命したのは、かれの妻ゲルトロードが、当時のポーランド公（1076年からポーランド王）ボレスワフ二世の伯叔母であり、さらにボレスワフの母ドブローネガは、イジャスラフにとって伯叔母（父ヤロスラフ [13] の姉妹）にあたっているという姻戚関係を持っていたことに明らかに拠っている〔栗生沢 2015: 748-749 頁〕。

91) 「スノフスク」(Сновъск) は、デスナ川右岸の支流スノフ川 (Снов; Сновъ) の河岸に建設された城砦。チェルニゴフから北東約 20km に位置する現在のセドニウ (Седнів) 村に相当する。

92) 「軍兵を対抗させた」(пристроиша вои прогиву) は、*HI-M* 全写本の読みだが、*ПВЛ* では пристроишася противу となっている。вои (軍兵) は通常、ルーシの公が遠征に動員する民兵を含む軍隊を指す語であり、ポロヴェツ人を指すのは不自然であること、вои の語が繰り返されるのは文脈的にも不自然であることなどから、*HI-M* の読みは後代の挿入による可能性が高い。

93) ここは、*Км* удариша в нѣ; *Ак, Бр* удариша всѣ; *Ип, Лвр* удариша в конѣ; *Рдз, Акд* удариша копы; *НК1, С1, Н4* удариша в кони と異読が多い。ひとまず *Км* の読みを訳出したが、*Ак, Бр* の読みも含めて文意があまり通っていない。もっとも文脈に合致している *Ип, Лвр* および *НСГ* の удариша в конѣ/кони (馬を駆けさせて) が本来の読みだろう。

ツ人の] ある者たちは打ち殺され、別の者たちはスノフ川で(въ Снови)溺れた⁹⁴⁾。かれら〔ポロヴェツ人〕の侯(князь) シャラク⁹⁵⁾(Шаракан)を捕まえた。11月1日だった。

そして、スヴァトスラフ[C]は捕虜とともに⁹⁶⁾、自分の城市〔チェルニゴフ〕に帰還した。
[同年, スヴァトスラフ[C]はスノフスクでポロヴェツ人を打ち負かした]

【フセスラフ[L]がキエフの公座に就く：1068年9月】[№193]

フセスラフ[L]はキエフに座した。

【十字架接吻の誓約違反への戒め：十字架の力についての訓話】[№194]

これはキリスト教徒の力⁹⁷⁾をあらわされたのである⁹⁸⁾。イジャスラフが尊い十字架に接吻し

94) 「溺れた」は *Н1-М* 共通で истопоша だが、*Ин, Лер* は потопоша。12世紀の年代記での用例としては、前者のほうが広く使われており、本来の読みである可能性が高い。

95) 「かれらの候シャラク⁹⁵⁾を捕らえた」(а князь их яша Шаракана)の Шаракана の語 (*Н1-М* 全写本にあり、*НК1, Н4* Шарукана)は、*ПВЛ Лер* では а князя ихъ яша рукама となっている。この下線部分は、я Шарукана (シャラク⁹⁵⁾を捕まえた)と誤読できる可能性が非常に高く、また *Н1-М* の読みは構文的に不自然であることから、上注92の挿入と同様に *Н1-М* 編者による誤読にもとづく挿入によるものだろう ([Михеев 2011: С. 33-34]も参照)。なお、シャフマトフは、Шаракан を *КНС* にあった本来の読みとしているが [Шахматов 2003 (1947): С. 459]、これは誤りと見るべきだろう。

このポロヴェツ侯(князь)、すなわち部族の首長「シャラク⁹⁵⁾」は、この年から39年後の *ПВЛ1107* 年の記事で、ボニャク(Боньяк)と共同してペレヤスラヴリ地方へ遠征したポロヴェツ侯(князь)として言及されている「老シャルーカ⁹⁵⁾」(Шарукань старыи)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 281]を参照していると思われる、*Н1-М* 編者による人名の挿入も、この記事にある候の名を採った可能性が高い。そのため、この時に若いときの「シャルーカ⁹⁵⁾」が捕虜となったという歴史的信憑性は低い。

96) 「捕虜とともに」は、*Н1-М* 全写本で с полономъ だが、*ПВЛ* では全ての写本で с побѣдою となっている。возвратитися с полономъ は12世紀の年代記(『キエフ年代記』『スーズダリ年代記』)の定型的表現だが、通常は、掠奪遠征に出かけた公の部隊が帰還したときの戦果を誇る文脈でもっぱら使われている。本記事はスヴァトスラフ[C]のチェルニゴフ城市の防衛を描いており、с полономъ の表現は不自然であることから、後代の *Н1-М* 編者による改変と思われる。一方、возвратитися с побѣдою の表現は『原初年代記』でも使われており、こちらのほうが文脈的に自然であり、本来の読みであると判断した。

97) *Н1-М* 全写本 силу крестнианскую/христианьскую (キリスト教徒の力)に対して、*ПВЛ* 全写本 силу крестную/крестьную силу (十字架の力)と異読がある。文脈における整合性から見て、明らかに後者の *ПВЛ* の読みが本来的である。

98) 十字架が悪を祓う力を持つことについては、本年代記ではこれまで、983年の項の「(悪魔は)尊い十字架によって他の国々では追い払われた」(но диаволъ прогонимъ бѣше крестомъ честнымъ во инѣхъ странах)[№83]、1015年の項の「悪鬼どもは主の十字架を恐れる」(бѣси бо и креста господня боятся) [№129]などで述べられてきた。この訓話では、ヤロスラフの三人の息子たちによる十字架接吻誓約違反を契機に、このテーマが展開されている。

ながら、かれ〔フセスラフ〕を捕まえたからである⁹⁹⁾。それゆえに神は異教徒を導き入れたのであり¹⁰⁰⁾、尊い十字架が、明らかにこの者〔フセスラフ〕を救ったのである。

十字架拳榮の祭日に¹⁰¹⁾、フセスラフ [L] は嘆息して言った。「おお、尊い十字架¹⁰²⁾ よ、わたしはあなたを信じていたのですから、この穴からわたしを免れさせ¹⁰³⁾ て下さい」

〔十字架に〕接吻した〔者は〕尊い十字架〔の誓い〕を破らないよう、神はルーシの地に教えるために、キリスト教徒の力¹⁰⁴⁾ を示されたのである。もしも誓いを破る者があれば、ただちに罰を受け、来世においても永遠の苦しみを〔受けるだろう〕。十字架の力は偉大だからである。

十字架によって悪鬼どもの力〔軍団〕(силы бѣсовскыя) は打ち負かされる。十字架は戦いで公たちを助け、十字架によって守られた信仰ある人々は敵対者たち(супостаты противныя) を打ち負かすのである。十字架は信仰をもって十字架に呼びかける者たちをすぐさま攻撃から逃れさせる。十字架ほど悪鬼ども(бѣси) が恐れる¹⁰⁵⁾ ものは何もない。もしも悪鬼どもによって妄念(мечтание) が起るならば、顔に十字架のしるしを切れば追い払われる。

99) [№ 187] の記事で、ヤロスラフの三人の息子たちが、十字架接吻によって「悪しきことをしない」(не створим ти зла) と誓いながら、誓いを破ったことを指している。

100) 「それゆえに神は異教徒たちを導き入れた」(тѣм же наведе Богъ поганыя) は、[№ 189] 冒頭の、「神が異教徒たちを導き入れる」(Наводит бо Богъ поганыя) の表現と対応しており、同じ年代の記事にあることから、明らかにこれを参照している。

101) 「十字架拳榮の祭日に」(въ день бо Въздвиження) の日は、1068年9月14日の日曜日に当たっており、これは、フセスラフ [L] がキエフ市民の手で解放された9月15日(上注86)の前日にあっている。このフセスラフの祈りのエピソードは、あたかも十字架の力によって、かれの解放がなされたという因果関係を暗示している。

102) ここで呼びかけている「尊い十字架」は、フセスラフがヤロスラフの息子たち三兄弟と和議を結んだときにその遵守を誓った十字架(上注99)そのものである。この和議のとき、一族の家宝であるウラジーミル聖公[08] 伝来の十字架をもって誓ったにもかかわらず、三兄弟はそれに違反した。フセスラフはキエフの公座に就いたとき、その十字架を奪って自らのものとした。『ノヴゴロド第一年代記(古輯)』6577(1069)年の記事に「尊いウラジーミルの十字架」(крест Владимиръ)がノヴゴロドの聖ソフィア教会で見出された」とあるが、これは、ノヴゴロド公グレーブ[C1]が、ノヴゴロドを来襲したフセスラフ[L]を撃ち破り、かれを捕虜としたときに、フセスラフから取りあげたものだろう。その後、グレーブ[C1]はこの十字架を、呪術師退治に用いている[№ 210](下注210参照)。

103) 「この穴からわたしを免れさせる」(избави мя от рова сего) は、『詩編』39:3の句「(主は)悲惨の穴からわたしを引き上げ」(и возведе мя от рова страстей) およびこれを参照した祈禱文に基づいているだろう。「穴」(ров) は牢舎を暗示している。

104) ここにも、上注97とまったく同じ異読があり、「十字架の力を」(силу крестную) が本来の読みである。

105) 「悪鬼どもは十字架を恐れる」(боять бѣси креста) ことについては、1015年の項の「ボリス殺害の物語」に付された悪鬼と天使の考察[№ 129]の中でも述べられている。本訓話の作者は年代記のこの部分を参照したのかもしれない。

【フセスラフ [L] のキエフの公座就位の期間：1068 年 9 月～1069 年 4 月】 [№ 195]

フセスラフ [L] は、キエフ〔の公座〕に7か月のあいだ座していた¹⁰⁶⁾。

【イジャスラフはポーランド公ボレスワフとともにキエフに迫る、フセスラフはキエフからポロツクへと逃走する：1069 年 3 月～4 月】 [№ 196]

6577(1069) 年

イジャスラフ [B] は、ボレスワフ¹⁰⁷⁾ (Болеславъ) とともにフセスラフ [L] を攻めるための進軍を始めた¹⁰⁸⁾。フセスラフ [L] は、これに対する進軍を始めた。フセスラフ [L] はベルゴロド¹⁰⁹⁾ (Бѣльгородъ) に来た。夜になると、〔フセスラフは〕キエフ人たちから隠れて、ベルゴロドからポロツクへと逃げた¹¹⁰⁾。

【イジャスラフ [B] はリヤヒ人とともに〔キエフへ〕来た、一方フセスラフ [L] はポロツクへ逃げた】

【キエフ人は、スヴァトスラフ [C] とフセヴォロド [D] に請願し、イジャスラフによる懲罰を免れる保障を得る：1069 年 4 月】 [№ 197]

翌朝、〔キエフ人たちは〕公〔フセスラフ〕が逃げたのを見て、キエフに戻り、民会(вѣче)を開いて、スヴァトスラフ [C] とフセヴォロド [D] に使者を派遣して¹¹¹⁾ 言った。「われらはすでに

106) イジャスラフ [B] は 1069 年 5 月 2 日にキエフの公座を回復しており [№ 198]、フセスラフ [L] は確かに、1068 年 9 月 15 日～1069 年 4 月のおよそ7ヶ月間、キエフの公座に就いていたことになる。

107) 当時のポーランド公で、1076 年からポーランド王となるボレスワフ二世大胆王 (Bolesław Śmiały, 在位 1076-79 年) のこと。イジャスラフ公にとってボレスワフは義甥(妻の甥)にあたり、リヤヒ人のもと(ポーランド)に亡命したときイジャスラフ公はボレスワフの庇護を受けていたことが分かる(上注 90)。

108) この時期の詳細は記されていないが、三月暦の 6577 年記事の冒頭に書かれていることから、イジャスラフは 1069 年 3 月中にボレスワフ王の軍とともにクラクフを進発したと考えることができるだろう。

109) ベルゴロドは、キエフから南西へ 23km ほどのイルベニ川右岸に位置する付属城市。クラクフ⇄サンドミェシュ⇄ヴラジミル⇄ルーツク⇄ドロゴブーヅ⇄キエフの西方諸都市とキエフを結ぶ街道沿いに位置し、キエフにとっては西方からの敵から城市を防衛する最前線の城砦にあたっていた。

110) フセスラフがポロツクに逃げた、すなわちキエフの公座を去った時期については、かれは 1068 年 9 月 15 日に牢舎から解放されてすぐにキエフの公座に就いて、それから7ヶ月のあいだ公座に座していた(上注 106) ことから計算すると、1069 年 4 月の中頃ということになる。この4月中頃という時期は、この記事が三月暦の記事の冒頭おかれていること、さらにキエフへ進軍してきたイジャスラフが5月2日にキエフに入城している [№ 198] ことから確認できる。

111) スヴァトスラフ [C] はチェルニゴフにいたが、フセヴォロド [D] の居所については記録にない。キエフ人の暴動によってイジャスラフ [B] がキエフから逃げ出したとき(上注 90)、フセヴォロドは支配領地のベレヤスラヴリへ逃げて、そこにいたのだろう。

自分の公〔イジャスラフ [B]〕を追い出すという、悪事 (зло) を行いました。見よ、〔イジャスラフ〕はわれらに対してリャヒの地 (лятьская земля) を導き入れようと¹¹²⁾ しています。どうか、あなた方二人は、自分たちの父の城市に来て下さい。もしあなた方二人が〔それを〕望まないのなら、[191] われらは自分たちの城市を焼き払い、ギリシアの地¹¹³⁾ (земля грѣчская) へ行きます¹¹⁴⁾】。

スヴァトスラフ [C] は、かれらに言った。「われら二人は、自分たちの兄〔イジャスラフ〕のもとに使者を遣ろう。もしも、かれがお前たちを滅ぼすためにリャヒ人〔ポーランド人〕を率いてお前たちを攻めるべく進軍するなら、われら〔二人〕は戦争をもってかれに対するだろう¹¹⁵⁾。われら二人は、自分の父の城市〔キエフ〕を滅ぼすことを許さない。だがもし、かれが平和をもって〔来る〕つもりであるなら、かれは少数の従士たちを率いて来るだろう」。こうして、〔二人は〕キエフ人を安心させたのである。

スヴァトスラフ [C] とフセヴォロド [D] の二人は、イジャスラフ [B] のもとに使者を遣って、こう言った。「フセスラフ [L] は逃げました。リャヒ人〔ポーランド人〕をキエフに導き入れないで下さい。〔われら二人は〕あなたに敵対しません。もしもあなたが城市を滅ぼすような怒りを抱いているとしても、どうか分かって下さい。われら二人は父の公座 (отънь столъ) を失いたくない¹¹⁶⁾ ことを」。

【イジャスラフ [B] は息子ムスチスラフ [B1] を先行してキエフに派遣し、ムスチスラフはキエフ人を弾圧する。その後イジャスラフが入城して公座に座す：1069年5月2日】 [№ 198]

イジャスラフ [B] はこれを聞いて、リャヒ人〔ポーランド人〕を残し、〔ポーランド公〕ボレ

112) 「リャヒの地を導き入れる」 а се ведеть на ны лядськую землю は大げさな表現に見えるが、земля が用いられているのは、*ПВЛ* の表題句 откуда есть пошла русская земля と同様に、集団が移動してその地に定住して支配を確立するという「勢力」の意味合いを持たせているだろう。一時的な導入（援軍）であれば、直後の не води ляхов の句にあるように ляхи を使うはずである。

113) 「ギリシアの地へ」は *НІ-М* в землю грѣчскую だが、*ПВЛ* въ гречьску землю と語順が異なる。この表現は、直前にある лятьскую землю と対比的に使われていることを考慮するなら、後者が本来の読みである可能性が高い。

114) このキエフの民会の使者の言葉は一見すると突飛に見えるが、1071年記事 [№ 206] に、一人の呪術師がキエフに出現し、「ドニエプル川が逆流し（…）ギリシアの地はルーシの地に位置する」ことを予言して「無知な者たちはかれに聞き従った」と記されている（下注 143）。このような当時の一種の終末論的な風評が、使者の言葉に影響を与えた可能性もあるだろう。

115) 「われらはかれに戦争をもって対する」 (то вы противу ему рагью) の вы (*НІ-М* 共通) は、「あなたがた」ではなく「われら二人」の意味。対応する *ПВЛ* 諸写本では въ と双数一人称主格形が使われている (*Хлб* は мы)。後代の *НІ-М* 編者 (14～15世紀) は双数形を誤解して вы で写したのだろう。

116) 「われら二人は（…）失いたくない」は *Км* яко нама жаль ти есть; *Ак*, *Бр* нама яко жаль; *Лвр*, *Ип* яко нама жаль と異読がある。*Км* の読みはこの編者（写字生）に特有の、解釈による補足的改変だろう。

スラフとともに少数のリヤヒ人〔ポーランド人〕を伴って進み始めた。かれ〔イジャスラフ〕は、自分の息子ムスチスラフ [B1] を、自分より先にキエフへと派遣した。ムスチスラフ [B1] は〔キエフに〕 やって来ると、かつて〔牢舎を〕 壊してフセスラフ [L] を助け出した 70 人を斬り殺し、他の者はその眼を潰し、また他の者は取り調べもせずに、何の咎もなくこれを滅ぼした〔殺した〕。

イジャスラフ [B] が城市に向かうと、人々は城市を出て拝礼して出迎えた¹¹⁷⁾。そしてキエフ人は自分たちの公を受け入れた。イジャスラフ [B] は自分の公座に座した。5月2日だった。かれ〔イジャスラフ〕はリヤヒ人〔ポーランド人〕をその扶養のために各地に行かせた¹¹⁸⁾が、リヤヒ人〔ポーランド人〕は密かに打ち殺された¹¹⁹⁾。〔そこで、〕ボレスワフは自分の地へと帰った¹²⁰⁾。

117) 「城市を出て出迎え」(изидоша противу), 「拝礼する」(с поклономъ) は、城市民が降伏して、服従の意を表する儀式的な身振り。

118) 「リヤヒ人をその扶養のために各地に行かせた」(распуща ляхы на покормъ) の「リヤヒ人」は、イジャスラフがキエフ入城のときに「少数率いてきたリヤヒ人（ポーランド人）」(мало ляховъ поимъ) のことで、同行したボレスワフの配下のポーランド兵と考えられる。

この「扶養」(покорм) とは、公に仕える従士が、公の支配地に向向いてその住民から直接に食糧（金銭の場合もある）の供与を受けるもの、『ルーシ法典』の第 42 条には〈人命金徴収人〉(вирник) の場合として「扶養」の内容が制度的に定められている。本年代記の序文には「かれ〔公〕の従士たちは、他の国々を戦い獲りながら、自らを扶養していた」(а дружина его кормяхуся, воююще ины страны) とありに、武力を背景に征服地、支配地の住民から食料・金銭を徴発することが、11 世紀の基本的な従士への給与形態だった。

このような扶養料徴収については、*ПВЛ (Лер)* の 1018 年記事に非常に似た状況が描かれている。スヴァトボルク [07] の援軍としてキエフへ進軍したボレスワフ王（一世）は、スヴァトボルクの配下に対して「扶養のために、わしの従士たちを諸城市へと連れていけ」(разведете дружину мою по городомъ на покормъ) と要求して、王の従士たちはキエフ地方の諸城市へ散った。従士たちは、諸城市の住民から財貨を徴発することによって、かれらの遠征に対する報酬を獲ろうとしたのである。一方、スヴァトボルクは手勢が少なくなった王を裏切って、キエフにいたポーランド兵を殺害している [ПСРЛ Т. 1: Стб. 143]。本エピソードもまた、同様の状況にあって、イジャスラフはポーランド兵に対して、キエフ地方で徴発によって財貨を得ることを許したと考えられる。

なお、ヤン・ドゥウゴシュの『ポーランドの歴史』第 3 書 (*Historiae Polonicae libri III*) には「ポーランド兵たちは諸城市と村々で冬を越した。イジャスラフ (Zaslaus) はかれらのための服や食事を供給した」 [Щавелева 2004: С. 114, 263] と並行的な記述があるが、ポーランド兵の殺害については書かれていない。

119) 誰が「打ち殺した」(избиваху) かは記されていないが、「扶養」(покорм) の供与を迫られたキエフとその地方の住民が、各地に散ったポーランド兵の数が少ないことに乗じて、イジャスラフの意向に反して（「密かに」(отай)), かれらを殺害したのだろう。その行動の背後には、ポーランド軍とともにやって来たイジャスラフの息子ムスチスラフ [B1] の、キエフ人への仕打ちに対する反感があったことは容易に想定できる。

120) ヤン・ドゥウゴシュの『ポーランドの歴史』第 3 書 (*Historiae Polonicae libri III*) に次のような追加的な情報がある。「ボレスワフは自分の全軍隊とともに、ここ〔キエフ〕に夏、秋、冬と滞在した。ポーランド兵たちは諸城市と村々で冬を越した」 [Щавелева 2004: С. 114, 263] とあり、これによれば、ボレスワフがキエフを去ったのは、1070 年の春のことと推定される。

イジャスラフ [B] は丘の市場を占拠した¹²¹⁾。

[そして、下町が焼けた¹²²⁾]

【イジャスラフ [B] は息子ムスチスラフ [B1] を派遣してフセスラフ [L] をポロツクから追い出し、二人の息子を順次ポロツクの公座に据える：1069年夏～秋】 [№ 199]

〔イジャスラフは〕フセスラフ [L] をポロツクから追放した。そして、自分の息子〔ムスチスラフ [B1]〕をポロツク〔の公座〕に据えた。かれ〔ムスチスラフ〕が間もなくそこで死んだので、〔イジャスラフ [B] は〕、その兄弟のスヴァトポルク [B3] をその代りに〔ポロツクの公座に〕据えた¹²³⁾。フセスラフ [L] は逃げ去っていたのである¹²⁴⁾。

121) 「丘の市場を占拠した」は *HI-M* 全写本 *взя торгъ на гору* の訳だが、文法的にも、内容的にも不整合である。*ПВЛ, НСГ* 諸写本は *възгна торгъ на гору* (市場を丘の上へと追いやった〔移した〕) であり、表現が不自然ではあるものの (それが *HI-M* における改変の理由か)、この読みが本来のものだろう。

この「市場」(торг) は、民会が行われた下町の「市場」(торговище) (上注 65) と同じものを指しており、それを「丘の上へと追いやる」とは、かつて自分をキエフから追放し、帰還した現時点においても自分に反感を持っている下町のキエフ人対策として、民会を組織する場を丘の上に移して、監督しやすくしたのではないか [Комментарии к ПВЛ 2012: С. 354]。なお、ザクレフスキイは、ウラジーミル街区の十分の一教会の前の *Бабин торжок* と呼ばれる広場に、「市場」(торг) が移されたとしている [Закревский 1858: С. 73]。

122) *HI-C* 「下町が焼けた」は *погоре Подоліе* と短い、これは、前注の、イジャスラフによる下町 (Подол) にあった市場 (торг) の丘への移設と関係があるだろう。移設が強制的な措置 (「上へ追いやった」) とすると、それには既設の市場を焼くという手段が伴っていたことが考えられる。そのことを言っているのではないか。

123) このイジャスラフによるポロツク遠征とフセスラフ追放については、ヤン・ドゥウゴシュの『ポーランドの歴史』第3書 (*Historiae Polonicae libri III*) に並行的な詳しい記述がある。それによれば、「キエフ公イジャスラフ (*Zaslaus Kyowiensis dex*) は、ポーランド王ボレスワフがキエフに滞在しているときに、ポーランドとルーシの兵士を率いて、フセスラフ公 (*Wscheslaus*) を攻めるべくポロツク (*Poloczsko*) へ進軍した。かれ〔フセスラフ〕はかれとポーランドの軍勢に恐れをなして逃げ出した。イジャスラフは、ポロツクの城砦と地方を支配下に置くと、自分の息子ムスチスラフ (*Msczislau*) をそこに据え、かれがわずかな日数ののちに死ぬと、代わりに他の息子のスヴァトポルク (*Swantopelkon*) を据えた。そして〔イジャスラフは〕キエフへ帰還した」 [Щавелева 2004: С. 114, 263] とある。これを、[№ 200] 記事とのかかわりで見ると、このポロツク遠征は、1069年秋 (9月～10月前半) に行われたと考えられる。

124) 「フセスラフは逃げ去っていた」は *HI-M, ПВЛ* ともに *Всеславу (же) бѣжавшу* と独立与格構文で表現されており (*НСГ* 諸写本では *Всеслав же бѣжа* と動詞アオリストが使われているがこれは二次的な改変だろう)、前のイジャスラフの息子たちのポロツク公就位の理由の説明として付されたものと解釈した。

【フセスラフ [L] がノヴゴロドを攻めるが、ノヴゴロド公グレーブ [C1] はグゼニ川の戦いで撃退する：1069年10月】 [№ 200]

[[6577(1069)年] その年の秋, 10月23日, 主の兄弟聖ヤコブの日の金曜日, 昼の第6時に, 再びフセスラフがノヴゴロドへと進軍した。ノヴゴロド人はかれらに対抗して, グゼニ川¹²⁵⁾の(на Къземли)の狩場のところ(у звѣринця)に¹²⁶⁾部隊を布いた。そして, 神はグレーブ公 [C1] (Глѣб князь) とノヴゴロド人を援けた。

ああ, ヴォヂ人¹²⁷⁾ (вожняны) にとって大いなる斬り合いだったことか。かれらは数えきれないほどの数が斃れた。だが, [グレーブ] 公自身は, 神のおかげで釈放された¹²⁸⁾。

一方, 翌日〔の朝〕に, ウラジーミル [06] の尊い十字架が発見された。ノヴゴロドの聖ソフィア〔聖堂〕においてだった¹²⁹⁾。これは, 主教フェオドール¹³⁰⁾ (Федор) 在位のときだった¹³¹⁾

125) 「グゼニ川」は原文では Къземль で, ヴォルホフ川左岸支流の小川 речка Гзень のこと。河口は, ノヴゴロドのソフィア大聖堂から北へ1kmほどソフィア区側だが, 現在は埋め立てられている。

126) グゼニ川(前注)から南側一帯, ネレフスキイ街区の北隣には, 当時狩場 звериница があり, 河口から560mほど南西にあるズヴェーリン修道院(Зверин-Покровский монастырь)にその名が残されている。

127) 「ヴォヂ人」(вожняны)はフィン・ウゴル系民族で, 現ロシア, レニングラード州のフィンランド湾沿岸地帯に居住し, 民族名としては водь とも表記される。英語読みではヴォート人(Votes)。この民族から多くの者が, ノヴゴロドの民兵(вои)として徴兵されていたのだろう。

128) この「公自身は神のおかげで釈放された」(а самого князя отпустиши Бога дѣля)は解釈が難しい。この「公」がグレーブ公 [C1] を指していることは間違いがないが(フセスラフ [L] は記事中で公と名指されていない), отпустить от чего には, 身体的な解放と精神的な解放と(罪の赦しなど)の二様の解釈が可能である。前者の可能性が高いが, その場合には, グレーブは一時的にフセスラフ陣営に捕らえられて, 何らかの理由で釈放されたことになる。しかし詳細はまったく不明である。

129) この十字架と発見場所については, НСГ(НК1, С1, Н4)および Твр に次の句が付加されている, на полатѣхъ, его же вязлъ бѣ Всеславъ князь ратью въ святѣи Софѣи ((発見されたのは聖ソフィア聖堂の)上階聖歌隊席においてだった。それ〔十字架〕は, かつてフセスラフ公が聖ソフィア〔聖堂から〕戦争によって奪い取ったものだった)。

130) ノヴゴロド主教フェオドールについては「ノヴゴロド主教表」[№ 109]にも名があり, その在位は, 1069年～1077年 [Карпов 2017: С. 410]。

131) この [№ 200] の記事は, Н1-С1066年記事 [№ 185] と, ①ポロツクとノヴゴロドの抗争についての記事である, ②Н1-Сの独自記事で, 他の同時代の年代記には並行記事はない, ③年代記には例外的な概嘆の表現がある, という三つの点において共通しており, 同じ典拠資料から採られたことは明らかである。

【ロスチスラフ [D2] の誕生：1070 年】 [№ 201]

6578(1070) 年

フセヴォロド [D] に息子が生れた。かれはロスチスラフ [D2] と名付けられた¹³²⁾。

[ロスチスラフ [D2] が生まれた]

【ヴィドビチ修道院の聖ミハイル教会の定礎：1070 年】 [№ 202]

この年、フセヴォロド [D] の修道院¹³³⁾ の中に聖ミハイル教会¹³⁴⁾ が定礎された。

[そして、聖ミハイルの教会が定礎された。キエフの修道院〔において〕]

【ポロヴェツ人によるロシ川北岸の諸城市への掠奪遠征：1071 年】 [№ 203]

6579(1071) 年

ポロヴェツ人がラストヴェツ¹³⁵⁾(Раствовец)とネヤチン¹³⁶⁾(Неятин, Ятин)のところで掠奪をした。

【フセスラフ [L] はスヴァトポルク [B3] をポロツクから追放する：1071 年】 [№ 204]

この年にフセスラフ [L] がスヴァトポルク [B3] をポロツクから追放した¹³⁷⁾。

132) ロスチスラフ [D2] はフセヴォロド公と再婚相手との間の息子で、ウラジーミル・モノマフ [D1] の 17 歳離れた異母弟にあたる。1093 年にポロヴェツ人とのストウグナ川の戦いで 23 歳の若さで戦死している。

133) この記事は直前の記事と一体のものとして書かれており、「フセヴォロド [D] の修道院」(манастырь Всеволожь) となっているのは、この年に生まれたかれの息子ロスチスラフ [D2] の洗礼名がミハイルであり、その洗礼名にちなんで、父フセヴォロド [D] が守護聖人である大天使ミハイルに献堂した修道院(その主聖堂)の創建を発願した可能性が高い [Литвина, Успенский 2006: С. 599-600][Комментарии к ПВЛ 2012: С. 354]。

134) キエフの丘南東のドニエプル川河岸のヴィドビチ修道院(Выдубицкий манастырь)の主聖堂の教会を指している。*Ип, С1* には記事の最後に на Выдобичи/Выдобычи の補筆がある。大天使ミハイルに献堂されていた。*ПВЛ*1088 年記事には府主教等による献堂式の記事があり、定礎から 18 年かかって完成したことになる。

135) 「ラストヴェツ」(Раствовец)は、ロシ川上流左岸支流の、現在のロスタヴィツァ川(Роставиця)沿いにあった城砦で、現在の Роставица 村に相当する。ここでは、1178 年にキエフの軍隊がポロヴェツ人に敗北している [Комментарии к ПВЛ 2012: С. 355]。

136) 「ネヤチン」(Неятин)は、前注のラストヴェツに近く、やはりロスタヴィツァ川(Роставиця)沿いの城砦で、現在のヤグニヤチン村(Ягнятин)に相当する。ドニエプル川右岸のポロヴェツ人はキエフに向かって北上して、ロシ川を渡って、沿域の城砦に掠奪を仕掛けたのだろう。

137) スヴァトポルク [B3] は 1069 年夏～秋に、ポロツクで没した兄のムスチスラフ [B1] を継いでポロツクの支配公になっていた(上注 123)。フセスラフ [L] は約 2 年後に自らの旧領を回復したことになる。

【ヤロポルク [B2] がフセスラフ [L] を撃ち破る：1071 年】 [№ 205]

この年、ヤロポルク¹³⁸⁾ [B2] がゴロティチェスク¹³⁹⁾ (Голотичьск) でフセスラフ [L] を打ち負かした¹⁴⁰⁾。

【悪鬼のそそのかしについての訓話¹⁴¹⁾ (1)：キエフにおける呪術師の予言の物語：1071 年頃】 [№ 206]

丁度この時期に、悪鬼 (бѣсъ) にそそのかされた一人の呪術師¹⁴²⁾ (волхвъ) がやって来た。か

138) 「ヤロポルク」(Ярополкъ)[B2]について説明はないが、直前の記事 [№ 204] との関係から、スヴァトポルク [B3] の兄弟 (おそらく兄) のことを言っている。年代記では本記事が初出で、のちに諸公間の内争に積極的に関与した。

139) 「ゴロティチェスク」(Голотичьск) の場所は確定は難しいが、現在のモギリョフの北西 34km にあるゴロフチン村 (в ѳ ска Галоўчын, Головчин) に同定する説がある。その場合、ポロツクから南へ 170km、キエフからなら北へ 400km 離れており、両都の中間に位置している。さらに、現リトアニアのネマヌス (ネマン) 川沿いのアリトゥース市 (Alytus) に同定する説もあるが、ポロツクから 330km も離れており、フセスラフがそこへ遠征する理由もわからない [Літопис руський, 1989: Указатель]。

140) この戦いは、キエフにいたヤロポルク [B2] が父イジャスラフ [B] の指示によって、ポロツクを回復するための遠征を行い、これに対してフセスラフ [L] はポロツクから迎撃のため (あるいはフセスラフが軍を立て直してキエフ占領を計画したか?) に出陣し、両都のほぼ中間の場所で戦ったということだろう。「打ち負かされた」(побѣди) 側のフセスラフは、ポロツクへ撤退したと思われ、その後、かれが 1101 年に亡くなるまでの間、キエフ公との紛争は年代記には記録されていない。

141) 「悪鬼のそそのかしについての訓話」との小見出しをつけた [№ 206-210] は、同一テーマのひとつままりの記事で、同じ編者による執筆、編集、年代記への編入が想定される。シャフマトフは複数の編者と異なる段階の年代記編入を想定しているが、編集史研究 (Михеев, Алешковский など) では、1090 年代の *КНС* 編者に帰しているものが多い。ギーモンも、少なくともヤーニのエピソード [№ 207] については、*КНС* 編者の手になると断言している [Гимон 2013: С. 66-69]。

142) これまで、「呪術師」と訳してきた вѣльхвъ/волхвъ の語は、聖書やビザンツ歴史書など翻訳文献からの引用の中で使われてきたが、以下の諸エピソードでは、ルーシ公の支配地での事件の叙述の中で使われている。

以下に、「悪鬼のそそのかしについての訓話」と小見出しを付けた諸エピソード [№ 206-210] は、「現世の悪事 (зло) は悪鬼どものそそのかし (бѣсовское наущение) によって起こり、それを悪鬼の手先となって体現しているのが呪術師たち (волхви) である。さらに、そのようなそそのかしは十字架の力で打ち負かすことができる」というモチーフに貫かれており、明らかに一人の編者によってまとめられて、この箇所には置かれたものである。

さらに、これらの訓話は、上にある「十字架の力についての訓話」[№ 194] の後半部分とモチーフと用語が共通しており、同じ編者の手になるものである可能性が高い。

れはキエフにやって来ると、こう語っていた。「わしのもとに5柱の神¹⁴³⁾が現れて、次のように語った。『人々に告げよ。5年目にドニエプル川は逆流する¹⁴⁴⁾。[それぞれの]地は別の場所に移動する。ギリシアの地がルーシの地に位置し、ルーシの地がギリシアの地に〔位置する〕[192]。他の地も変わる』。

無知な者たちはかれに聞き従ったが、信仰ある者たちは嘲笑して、かれ〔呪術師〕にこう言った。「悪鬼がお前をもてあそんでお前を滅ぼそうとしているのだ」。そのことは、かれの身の上を起こった。ある夜に、かれは行方知れずになったのだから。

悪鬼どもというのは、〔人を〕そそのかして悪事へと導く。それから、嘲り笑い、死の深淵に突き落とし、〔人に予言を〕語るよう教えるのである。そのような悪鬼の教えと行いについて、さあ、われらは語ろう。

【悪鬼のそそのかしについての訓話（2）：呪術師によるロストフ、ペロオゼロ地方の反乱と徴税人ヤーニによる討伐の物語：1071年頃】 [№ 207]

かつてロストフ地方¹⁴⁵⁾ (в Ростовьстѣи области) に飢饉 (скудости) があつたとき、ヤロスラ

143) この呪術師のもとに出現した「5柱の神」(5 богъ) については、託宣文の詩型によって、次の「5年目」(5 [пятое] лѣто) と韻を踏ませているのだろうが、同時に、979年記事 [№ 74] でウラジーミル [06] が屋敷の外に立てたとされる5柱の神〔ノヴゴロド第一年代記(1)：注445〕を連想させる。呪術師はキエフの運命を予言していることから、ウラジーミルが祀ったキエフの在来諸神の神官につらなる人物だったかもしれない ([Аничков 1914: С. 279] 参照)。

なお、1069年記事 [№ 198] のキエフ民会で「ギリシアへ行く」という発言した参加者は (上注114)、この呪術師に「聞き従った」者の可能性もあり、呪術師の出現はこの時期のことかもしれない。

144) 「川の逆流の予兆」のモチーフは、*ПВЛ* 1063年記事 (*НІ-М* にはない) の「この年ノヴゴロドではヴォルホフ川が5日間逆流した」にもあり、そこでは、1067年の実際に起こったフェスラフによるノヴゴロド占領と焼き討ちの予兆と、年代記記者によって解釈されている。なお、*НІ-М* 6684(1176)年記事にも「ヴォルホフ川が5日間逆流した」との記事があり、この川の逆流そのものは水位の一時的上昇による自然現象だったようである [Википедия: Волхов]。

145) ロストフはルーシ人公のもっとも古くからの支配地で、*ПВЛ*、*НІ-М* にはリユーリク [01] が「ある者にはロストフ (Ростовь) を、別の者にはペロオゼロ (Бѣлоозеро) を分け与えた」とあり、その後、ヤロスラフ [13] とボリス [14] が公として据えられている。その地方 (область) には、次注のヤロスラヴリの城市も含まれている。この時には、チェルニゴフ公のスヴァトスラフ [C] が支配し、代官 (息子のグレーブ [C1] ?) を派遣して貢税の徴収を行っていたか。

ヴリ¹⁴⁶⁾ (Ярославль) からの二人の呪術師 (два вълъхва) が決起して¹⁴⁷⁾、こう言った。「われら二人は、誰が自分のもとに食料を引き止めている¹⁴⁸⁾ か知っている」。二人はヴォルガ川に沿って (по Волзъ) 再び¹⁴⁹⁾ 進み始めた。二人はある郷¹⁵⁰⁾ (погост) に来て、そこで身分の高い女たち¹⁵¹⁾ (лучшая жены) を名指しして、「この女は麦 (жито) を、またこの女は蜂蜜を、またこの女は魚を、この女は毛皮 (скора) を引き止めている」と言った。そこで〔住民たちは〕自分たちの〔名指された〕姉妹、母親、妻をかれら二人のもとに連れて来た¹⁵²⁾。この二人はその妄念のなかで¹⁵³⁾〔女たちの〕肩のうしろ〔背中〕を切り裂いて、あるいは麦を、あるいは魚を、あ

146) ヤロスラヴリ (Ярославль) は現在も同名の、ヴォルガ川中流域で支流のコトロスリ川 (Которосль) 河口地点にある城市。コトロスリ川によって地方の中心である古都ロストフと結ばれている。ヤロスラフ [13] は父ウラジミール [06] によってロストフに据えられており、兄ヴィシエスラフ [09] の死にともなうノヴゴロドに移るまで (995年?) までのあいだ、この地方を公として支配していた〔ノヴゴロド第一年代記(2):注439〕。その期間に、ヴォルガ川の要所にかれの指示によって城砦が築かれたことが、その名の由来であることは確かだろう。

147) 「決起して」(въстага) は、集団で騒乱を起こすこと。なお、以下の呪術師の反乱の描写は、*ПВЛ* 1024年記事 (*НМ*にはない) にあるスーズダリにおける呪術師の反乱とヤロスラフ [13] による鎮圧の短いエピソード [ПСРЛ Т. 1: Стб. 147–148] と、反乱のきっかけやその推移(富裕層の住民を殺すなど) が類似している。

148) 「食料を引き止めている」(обилие дръжить) の「引き止める」держитиには二重の意味が込められている。第一は文字通り身体の中に貯め込んでいること、第二はもたらされるべき穀物の生育・収穫や漁獲が女たちの呪力によって止められているということを示している。ここでは、身分の高い女たちの身体を切り裂き、隠し持った麦や魚をあたかも身体の中から取り出したように見せることによって、呪術師たちは呪術的な飢饉からの解放者を自ら演じて見せているのである。年代記記者から見れば詐術(лесть)だが、呪術師と住民にとっては、飢饉から救われるための一種の供犠儀礼と解釈することも可能である。なお、「自分のもとに」(в себѣ) は *Км* だけの固有読み。

149) 「再び進み始めた」паки поидостаの пакиは *Км* の固有読み。

150) 「郷」(погост) は、支配公(ここではスヴャトスラフ [C]) が、支配領地(волость)において貢税を徴収する際の拠点として設けた居住地で、大きな川沿いなど、徴収巡行のための交通や貢税品の集積・輸送に便利なところに置かれていた。ここでは、ヴォルガ川沿いに設けられた貢税品集積地点を指している。詳しくは〔ノヴゴロド第一年代記(1):注244〕を参照。

151) 「身分の高い女たち」(лучшая жены) とは、各地の郷で貢税品の集積、運搬を管理する土地の名主の家筋の女たちのこと。

152) 住民たちは、自分たちの母、妻、姉妹たちが殺されることなど思いもせず、呪術師が飢饉の原因とした女たちの呪力を封じてもらうために、かの女たち呪術師のもとに連れて来たのだろう。

153) 「妄念のなかで」は *Км* мечтаниемъ своимъ だが、*Ак*、*Бр*、*ПВЛ* 諸写本は в мечтѣ で、後者が本来の読みである。ここでは、いわゆる神憑りの状態になったか、もしくはそれを演じたのだろう。

るいはリス毛皮を¹⁵⁴⁾とり出して見せた¹⁵⁵⁾。こうして二人は多くの女たちを殺し、かの女たちの財産を取って自分のものにした。二人はペロオゼロ (Бѣлоозеро) にやって来た。二人のもとには3百人の人々がいた¹⁵⁶⁾。

この時たまたまヴィシヤタ¹⁵⁷⁾の子のヤーニ¹⁵⁸⁾ (Янь, сынъ Вышатиный) が貢税を取り立てながら、スヴァトスラフ¹⁵⁹⁾ [C]のもとからやって来た。ペロオゼロ人は、「われらのもとでは、二

154) 「あるいはリス毛皮を」(или веверицю) は、*HI-M* 全写本と *Ип, Хлб* にあるが、*Лвр, Рдз* にはない。麦、魚、毛皮は呪術師の言葉として列挙されていることから、対応する *веверица* を削除することは不自然であり、この言葉を付加して、呪術師の言葉に合わせた、すなわち *HI-M* の読みは二次的な補筆によっている。

155) この女性から食料を「取り出す」呪術師の所作について、フィン・ウゴル系のモルドヴァ人 (мордова) の間に遺されている、共同体の祭りのための供え物を女性だけが集めるという風習との類似性を指摘する説もある [Фроянов 2012: С. 106]。なお、騒乱を起こしたペロオゼロからシエクсна川沿いの住民たちに、在来のフィン・ウゴル系住民 (例えば *ПВЛ* には「ペロオゼロ (Бѣлоозеро) のほとりにはヴェシ人 (весь) が、ロストフ湖のはとりにはメリヤ人 (меря) がいた」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 10] とある) とスラブ系住民 (移住民の子孫) の民族融合的な共同体とその習俗を見ることは、クリュチェフスキイの研究以来受け入れられている ([Ключевский Курс 1: С.303-306][Петрухин 2000: С. 319-321] を参照)。

156) 「二人のもとには3百人の人々がいた」は *HI-M* で бѣ у нею люди 300 だが、*Рдз, Ип* о нею людеи инѣх 300、*Лвр* бѣ у нее люди инѣх 300 と異読がある。おそらく、*HI-M* で о нею > у нею の改変と инѣх の脱落 (削除) が起こったのだろう。

157) 「ヴィシヤタ」(Вышата) は、ノヴゴロドの軍司令官オストロミール (Остромир) の息子で、ヤロスラフ [13] とその息子たちに仕えた。詳しくは [ノヴゴロド第一年代記 (3) : 注 385] を参照。*ПВЛ*1043 年記事で「[ヤロスラフ [13] は] 軍司令官職をヤーニの父ヴィシヤタに任せた」(а воеводство поручи Вышатѣ, отцю Яневу) と、やはり父子関係によって説明されている。

158) ヤーニ (Янь) の人名は、翻訳文献起源の人名 Иоаннь (Ιωάννης) のルーシにおける通用形として、Иванъ, Иванко, Янь 等の語形と同列に扱われており、事典等の項目の語形も硬子音終わりの Янь としているものが多い (邦訳でも「ヤン」)。だが、この軟子音終わりの語形は文献には珍しく (ほぼこの人物の例に限られる)、さらに諸写本でも Янь と混同されてることはないことから、別の語源も考えられるかもしれない。

*ПВЛ*1106 年記事にヤーニの死が伝えられており、「90 歳生きて老熟の境地にあった」(живь лѣтъ 90 в старости маститѣ) とあることから、本記事の 1071 年なら、かれは 55 歳だったことになる。また、同じ記事に、「わたしもかれから多くの物語 (словеса) を聞き、それをこの年代記に書き記した」とあることから、この [№ 207] の長い物語は、ヤーニからの聞き書きに基づいていると考えられる。

159) 以下の記述から、この頃 (1070 年台前半) には、ペロオゼロとその一帯およびロストフからヴォルガ川流域一帯 (ヤロスラヴリ) はスヴァトスラフ公 [C] の領地 (волость) であったことが分かる。

フロヤノフはヤーニを「キエフの貴族」(Киевский боярин) としており、その場合には、スヴァトスラフ [C] がキエフ公であった時期 (1073 年 3 月 22 日 ~ 1076 年 12 月 27 日) に、キエフからスヴァトスラフの命を受けてヤーニが徴税部隊を率いてやって来たことがひとまず想定される [Рапов 1979: С. 144]。1076 年にペロオゼロ地方で寒冷の夏が観測されていることなどから、この年の出来事である可能性が高い [Фроянов 2012: С. 101, 104]。

人の妖術師¹⁶⁰(кудесник)がヴォルガ川(по Волзи)とシェクスナ川(по Шекъшнѣ)に沿って¹⁶¹多くの女をすでに殺し、ここに來ている」とかれに物語った。ヤーニは「この二人の呪術師が誰に属する平民¹⁶²(смерд)かを尋ね、自分の公〔スヴァトスラフ[C]〕に属することを知ると、二人の妖術師を取り巻いている者たちのところへ使者を遣って、かれらに言った。「この二人の呪術師をこちらに引き渡せ。かれらはわしとわし公の平民(смерд)なのだから¹⁶³」。

かれらがこれを聞かなかつたので、ヤーニは自ら武器を持たずに出かけたが¹⁶⁴、かれの従卒たち(отроки)がかれに言った。「武器を持たずに行つてはなりません。かれらはあなたに辱めを加える¹⁶⁵でしょう」。かれは従卒たちに武器を持つように命じた。かれに従つた従卒は12

160) кудесникъ(妖術師)の語は本年代記ではここが初出だが、ここでは волхвъ(呪術師)と言い換え可能な同義語として用いられている。волхвъは翻訳文献で用いられ、民間の宗教者を広く指しているが、кудесникの語は東スラブ(とくに北方)のレアリアのなかで使われているという違いがある。なお、ПВЛ912年のオレーグ[00]の死のエピソード(Н1-Мにはない)の中でも、Бѣ бовопрошал волхвовъ и кудесникъ(〔オレーグは〕呪術師、すなわち妖術師にかねてから訊いていたからである)のように同義語して使われている。

161) 呪術師たちとその仲間の行路は、ヤロスラヴリからヴォルガ川を下つてシェクスナ川の河口に行き、そこからシェクスナ川を遡つてペロオゼロまで到達したことが分かる。

162) 「平民」смердは、公の所領における主要な生産の担い手で、分与された土地に、家屋、耕地、家畜とその小屋を持つ者のことで[Рапов 1977: С. 225]、ここでは、公の領地の農民であり、公に対する貢税義務を課せられた者を指している。『ルーシ法典(簡素版)』の第26, 28, 33条に言及がある[ノヴゴロド第一年代記(3): 注247]。この語は史料においては基本的に公(князь)への貢税徴収とのかかわりで言及されており、さらに賦役、徴兵の対象とされることもある[Горский 2019: С 302-309]。

163) ここで、呪術師たちのことを「わしの公の平民」としているのは、Км тѣи суть смердѣ моего князя, Ип, Хлб, Рдз, смерда еста моего князяで、Ак, Бр, Лвр, НСГではсмерда(еста) моя и князя моегоと「わしとわしの公の平民」となっている。直前にはヤーニが「自分の公に属することを知つた」(увѣдав, яко своего князя)と「公」についてのみ記されていることから、前者が本来の読みで、後者の моя иの語は、続くエピソードの中でヤーニが独断で呪術師を処罰したことを受けた、二次的な付加の可能性が高い。

164) ヤーニが「自ら武器を持たず」(самъ безъ оружья)呪術師とその同調者のもとに行こうとしたこと理由については解釈が難しく、諸研究でもあまり考察されていない。以下の事態の進展から推察すると、ヤーニは、呪術師による騒乱を、首謀者と同調者を自らの従士部隊によって殺害するという鎮圧方法をとるつもりはなかつたのだろう。おそらく、かれの狙いは、呪術師の權威を失墜させ、同調者をかれらから離反させ、同調者を含む領地の平民たちに自ら呪術師を裁かせることによって、騒乱の鎮めると同時に、領地における今後の呪術師の影響力を排除することにあつた。以下に描写される、大勢(300人)の取り巻きに対して小勢(12人)の従卒しか率いていない、取り巻きの抵抗を受けると相手を殺すことなく(斧のみね打ちで殴り倒す)ペロオゼロにいったん引き上げる、呪術師との〈神学〉論争、領地民に血讐による呪術師殺害をうながす、土着儀礼にのつとつた死体のみせしめ等々は、すべてのそのような意図にそつて行われたのだろう。

165) 「辱めを加える」はКм, Ак, Бр С1, исьсоромятъ; Ип, Лвр, Н4, НК1 осоромят/осрамят。語根の「辱め」(сором)は、社会的に下位の者が上位の者に害されたときに発生する、社会的な評価(名誉など)の損失のことで、слава(榮譽)の対立概念。ここでは、ヤーニが呪術師の取り巻きに捕らえられるような事態を想定しているだろう。

人だった¹⁶⁶⁾。

かれは森の中をかれら〔呪術師の取り巻きたち〕のもとに出かけた。かれらも陣取って、武装して対抗した。ヤーニが斧を持って進んで行くと¹⁶⁷⁾、かれらの中から3人の男が進み出て、[193] ヤーニのもとにやって来て、かれにこう言った。「見たところ、あなたは死に行くことになります。行かないで下さい」。かれ〔ヤーニ〕は、この者たちを打ちのめすように命じて¹⁶⁸⁾、残りの者のところへと出発した。かれらは、ヤーニめがけて飛び掛かった。かれらのうちの¹⁶⁹⁾ひとりがヤーニを斧で打とうとしたが打ち損じた。ヤーニは〔奪い取ったその〕斧を裏返して、背(みね)で〔その男を〕殴り倒した。かれらを斬り殺すよう従卒たちにすぐに¹⁷⁰⁾命じた。かれらは森の中へ逃げ、そこでヤーニの司祭¹⁷¹⁾ (попинъ Яневъ) を殺した。

ヤーニはペロオゼロ人のところに、〔その〕城市に入り、かれらに言った。「もしもお前たちがこれらの呪術師を捕らえないなら、わしはお前たちのところから1年たっても立ち去らないだろう¹⁷²⁾」。ペロオゼロ人は行って、かれら二人を捕え¹⁷³⁾、かれ〔ヤーニ〕のもとに連れて来た。

166) この12人の解釈については、呪術師の権威を貶めるための儀礼的な執行者としての意味合いがあるかもしれない。988年記事で、ウラジーミルがペルーン像を破壊したときに[№101]、神像を侮辱するために、「12人の家臣をつけて棒で叩かせ」ている。

167) 高位の従士であるヤーニが、長剣(меч)ではなく斧(топор)を武器としていることについて、リハチョフは、次の[№210]のグレーブ公[C1]の手斧と同様に、身分の高い者が平民を相手の戦闘で長剣を使うことは相応しくないと見なされたのではないかと指摘している[Комментарии к ПВЛ 1950: С. 403]。その可能性とは別に、呪術師との戦いの武器として、斧は実用的以外の霊的な意味合いを持たされていたのではないか。

168) 「打ちのめすように命ずる」(повелѣвшю бити)は呪術師の尋問の場面(下注181)にも使われているが、反抗した平民に対する処罰のことを言っているのだろう。殺したわけではない。処罰の手段として犯罪者を「打ちのめす」(бити)ことについては、『ルーシ法典(拡大版)』第65条を参照。

169) 「かれらのうちの」の от них は *Км* のみの固有読み。

170) 「すぐに」の абие は *Км* のみの固有読み。

171) 「司祭」は *НІ-М* 全写本と *Лвр* では попин だが、*Ип*, *Рдз* попь と異同がある。どちらが本来の読みであるか定めがたい。

なお、以下のノヴゴロドの呪術師エピソード[№210]でも、キリスト教聖職者と呪術師の霊的な力の対立のモチーフがあることから、ここでもヤーニは呪術師との論争などに備えてキリスト教の力の行使者として、司祭(聴罪司祭?)を徴税部隊に同行させていたのだろう。[Мавродин 2002 (1940): С. 223]も参照。その後ヤーニは、あたかも殺された司祭の役割を自ら補うかのように、呪術師たちと(神学的)な論争を行っている。

172) 呪術師と取り巻きの抵抗によって、ヤーニは住民の手でかれらを捕まえさせる方針に転換した。「わしは一年たっても立ち去らない」(не иду от васъ за лѣто)とは、貢税徴収の部隊を長期に滞在させて、在地の担税民(平民)に扶養料や賦役などの負担を強いると脅すことによって、ペロオゼロの城市民に呪術師を捕まえさせようとしたのである。

173) 以下の叙述から判断すると(下注194)、ペロオゼロ人は計略によって呪術師たちを呼び出し、その場で二人を捕らえたようである。

〔ヤーニは〕二人に言った。「何のためにお前たちはこんなにも多くの人々を殺したのか？」二人は言った。「あの者たちが食料を引き止めているからだ。もしもわれらがこの者たちを絶滅し、打ち殺せ¹⁷⁴⁾ば豊作(гобино)になるだろう。もしもあなたが望むなら、われら二人は、あなたの目の前で、麦でも魚やでも、その他の何なりと取り出してみせよう」。

ヤーニは言った「まことに、お前たち二人は嘘を言っている。神は人間を土で創った。〔人間は〕骨と血の管からできていて、その中には何も無い。〔人間はその中について〕何も知らず、神だけが知っているのだ」。

二人は言った。「われらは知っている。人間がどのようにして創られたかを」。かれ〔ヤーニ〕は言った。「どのようにしてか？」二人は言った。「神が風呂で身体を洗って汗をかき、ぼろ布(вехъть)で身を拭って〔それを〕天から地上へと投げた。そこで、誰がそれ〔ぼろ布〕から人間を創るかについて、サタン(сотана)が神と争った。そして悪魔(дьяволь)が人間を創り、神がそれに魂を入れたのだ。だから、もしも人間が死ねば、肉体は地中に行くが、魂は神のもとに〔行くのである〕¹⁷⁵⁾」。

ヤーニはかれらに言った。「まことに、悪鬼(бѣсъ)がお前たちをそそのかしたのだ。お前たち二人はどのような神を信じているのか？」二人は言った。「反キリスト¹⁷⁶⁾(антихрист)を〔信

174) 「もし<...>絶滅し、打ち殺す」は *Н1-М, Ип, С1* *аще истребивѣ и избивѣ (Км избѣвасмѣ); Лвр, Рдз, Н4, НК1* *аще истребивѣ* の異読がある。どちらが本来の形か定めがたい。

175) この段落で呪術師が語っている人間創造の物語について、ガリコフスキイは、フィン系のモルドヴァ人の次のような創造神話との類似性を指摘している。「地上の悪神(Шайтан)が人間創造を思いつき、善神(Чам-Пас)にかたどって土で人間の形を作った。そして、鳥(蝙蝠)に命じて、善神の手ぬぐいの端に巣をつくって子育てするよう命じた。天上の善神が風呂上りに体を拭いたときに、手ぬぐいはバランスを失って地上に落下した。悪神はその手ぬぐいを取って、土塊を拭くと、善神のかたちをした人間ができた。だが、そこに魂はないため、善神が魂を入れた。その後、善と悪の神の間で、人間の帰属について諍いが起き、ついに、死後には魂が善神のもとに行き、腐った肉体は悪神に帰属することで決着した」。さらには、部分的にウクライナの宗教伝説にも類似のモチーフがあるという [Гальковский 1916: С. 135-136]。

176) 「反キリスト」(*Км Антихъст; Ак, Бр Антихристу*) は、『ヨハネの手紙1』2:18 や『ヨハネの手紙2』1:7などで、最後の時に到来するとされる「惑わし手」(лъстец)。この呪術師の〈神〉(бог)を反キリストとする図式は、人間が生まれる〈創造〉の場としての「風呂」(мовница)という民族的・民衆的世界観(上注175, [Бобров 2004: С. 100]も参照)と、おそらく当時キエフにもたらされていたキリスト教の終末観と二元論(オボレンスキイ, ガリコフスキイによれば「ポゴミール派的」)とを融合させて([Петрухин 2000: С. 321][Оболенский 1998: С. 304-306][Гальковский 1916: С. 136-141]参照)、ヤーニもしくは年代記記者が作り上げたものだろう。

なお、終末とは関わりなく悪鬼たちの首領として「反キリスト」を描き出すのは、*ПВЛ* 1074年記事のイサーキイの物語にもあり(「おまえの首領は反キリストで、お前たちは悪鬼どもである」*ващъ старѣшина Антихрестъ есть, а вы бѣси есте*) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 196]、おそらく同じ洞窟修道院の著者(編者)の手によるものだろう。

じている]。[ヤーニ]はかれら二人に言った。「それはどこにいるのか？」二人は言った。「深淵に座っている」。

ヤーニはかれらに言った。「深淵に座っているのはどのような神だと言うのか。それは悪鬼(бѣсъ)である。神は玉座に座して天にあり、天使たちに讃えられている。天使たちは畏れながらその前に立ち、それを見ることはできない。それらの[天使から]ひとりの天使がかつて落とされた。それを、お前たちは反キリストと呼んでいるのだ。この者は傲慢さのために、天から落されて、お前たちの言うように深淵にいるのだ。

かれ[反キリスト]は待っているのだ。神が天からやってきて来て、この反キリストを捕まえて、縄で縛り、かれを信じている従者たちと一緒に、永遠の業火の中に¹⁷⁷⁾ [194] 置かれる時が来るのを。お前たち[二人]は、ここではわしによって苦しみを受け¹⁷⁸⁾、死後にはあそこ[深淵][に身を置くだろう]」。

かれら二人は言った。「神々はわれら二人に告げている。あなたはわれらに何もできないと」。かれ[ヤーニ]は、かれら二人に言った「その神々はお前たちに嘘を言っているのだ」。二人は言った。「われらはスヴァトスラフ[C]の前に立つべきであり、あなたはわれらに何もできない¹⁷⁹⁾」。

177) 「永遠の業火の中に据える」 посадить в огни вѣчном は *Лвр* を除く *ПВЛ*, *Н1-М*, *НСГ* に共通の読みで、*Лвр* では下線部が脱落している。

178) 「ここでわしによって苦しみを受ける」 (здѣ мука пріяти от мене) とは、以下に述べられる「顎鬚を引き抜く」「打ち据える」「猿轡を噛ませる」「船梁に縛り付ける」(下注 180,184) 等のヤーニが加えた仕打ちを指している。

179) 「われらはスヴァトスラフの前に立つべきである」(нам пред Святославом стати) と「あなたはわれらに何もできない」(не можеші нама створити ничтоже) の文は、それぞれこの前後で呪術師たちによって繰り返されており、かれらにとって重要な主張であることが分かる。この言葉は間接的に「自分たちはあなたに殺されない」という予言にもなっている(下注 195)

興味深いことに、この箇所 of ヤーニと呪術師との論争には、『ルーシ法典(簡素版)』に反映されている(特に第1条)、殺人に対する慣習法的な解決(血族による復讐)と公に対する罰金(人命金)支払いによる解決の対立を見ることができる。すなわち、ここで呪術師たちは後者の立場から、自らの〈殺人〉について、『ルーシ法典』が規定している、公(ここではスヴァトスラフ公[C])による裁判を求めており、そのため自分たちは害されることなく(『ルーシ法典(簡素版)』第33条は、「公の言葉によらずに平民を苦しめる」ことを罰金をもって禁じている[ノヴゴロド第一年代記(3):注267])、キエフに連行されることは当然と考えている。それに対して、あとに見るように、ヤーニは、前者の立場から呪術師を地元民に処罰させようとしている。

なお、*Н4*, *HK1* では、нам пред Святославом стати の文に в Киевѣ/Киевѣ (キエフにおいて) の句が付加されており、後代(15世紀前半)の解釈的な挿入であるにせよ、キエフでの公による裁判を求めていることが一層よく分かる。

ヤーニはかれらを打ちのめし、顎鬚を引き抜くように命じた¹⁸⁰⁾。このように再び¹⁸¹⁾打ちのめし、割れ目をつけた棒(проскъль)で顎鬚を引き抜くと、ヤーニはかれら二人に言った。「お前たちに神々は何と言っているか」。かれらは言った。「われらはスヴァトスラフ[C]の前に立つべきである〔と神は言っている〕」。ヤーニは、かれらの口に枝の切れ端を噛ませ、かれらを船梁(ふなばり)¹⁸²⁾に縛りつけるようにたちまち¹⁸³⁾命じた。自分の前に〔二人を乗せた〕小舟を進ませ、自分はかれらのあとから出発した。〔一行は〕シェクスナ川の河口で止まった¹⁸⁴⁾。

ヤーニはかれらに言った。「神々はお前たちに何と言っているか？」かれらは言った。「神々はわれらに、あなたのためにわれら二人は生きていられないと言っている」。ヤーニはかれらに言った。「それはそれら〔の神々〕がお前たちに正しいことを告げたのだ」。かれら二人は言った「しかし、もしもわれら二人を放免するなら、あなたには多くのよいこと(добро)があるだろう。もし、あなたがわれらを滅ぼすなら、あなたは多くの悲しみ(печаль)と悪しき事(зло)を受けるだろう」。かれ〔ヤーニ〕はかれらに言った。「もしも、わしがお前たちを放免したら、わしは神から悪しき事を受けるだろう。もしお前たちを滅ぼせば、わしは神から報われる¹⁸⁵⁾であろう¹⁸⁶⁾」。

180) ここで、ヤーニが呪術師たちに対して、「打ちのめし」(бити), また「顎鬚を引き抜く」(погоргати брадѣ)いたのは、直前のヤーニ自身の言葉「お前たちはここではわしによって苦しみを受け」(и здѣ мука пріяти от мене)を実行に移した(上注178)と同時に、住民たちに対しては、呪術師の権威を貶める「見せしめ」の役割も果たしている。

犯罪者を「打ちのめす」ことは『ルーシ法典(簡素版)』第17条に処罰の方法として定められているが、行使できるのは被害者およびその親族に限られ、ヤーニの行為は法(правда)から外れている。さらに男の「顎鬚を引き抜く」ことは明らかに、相手を辱めて(осоромити)社会的権威・名誉を損なう行為であり、『ルーシ法典(簡素版)』第8条には、このような行為に対してとりわけ高額の罰金が課せられている(『ノヴゴロド第一年代記(3):注179]参照)。

181) 「再び」пакыは、上注63, 149と同様の*Км*の固有読み。

182) 「船梁(ふなばり)」(упругъ)は、小舟(лодья)の船底板を固定するために側板の間に渡す、湾曲させた板のこと。

183) 「たちまち」абиеは、上注170と同様の*Км*の固有読み。

184) ヤーニが、ベロオゼロで二人の呪術師を尋問(〈神学論争〉)したあとすぐに処刑せず、猿轡を噛ませた上、小舟に縛り付けてシェクスナ川を河口(ヴォルガ川)まで示威的に運んだのは、「反キリストを縛る」ことを模して呪術師たちに現世の「苦しみを受け」させる(上注178)と同時に、シェクスナ川沿岸の住民たちに、呪術師の屈服を見せつけてその権威を貶める意図によるものだろう(上注164参照)。

185) 「神から報われる」мъзда ми от Богаの表現は、ノヴゴロドのトロイツキイ遺構で派遣された推定年代1100-1120年の白樺文書№901に...же ти избуду сего, иск... мъзда ти отъ Бога будеть...の断片的文言があり[НГБ XI: С. 94], この言い回しが11-12世紀に世俗の伝達で使われていたことが分かる。

186) 「もしお前たちを滅ぼせば、わしは神から報われるであろう」(аще ли вас погубля, то мъзда ми от Бога будет)の文は、上注177と同様に、*Лер*を除く*ПВЛ*, *Н1-М*, *НСГ*に共通の読みで、*Лер*にはない。これは*Лер*系統の写本伝播における脱落と考えられる。

ヤーニは運搬人たち¹⁸⁷⁾ (повозники) に言った。「血縁の誰かがこの者たちに殺された者が、お前たちのうちにいないか¹⁸⁸⁾」。かれらは言った。「わたしは母が、他の者は姉妹が¹⁸⁹⁾」。かれ〔ヤーニ〕はかれらに言った。「自分の身内の仇を討て」。

かれら〔身内を殺された運搬人たち〕はかれら〔二人の呪術師〕を捕らえて打ち殺し、これをカシワの樹に(на дубѣ)吊した¹⁹⁰⁾。〔この者たちは〕神から正しく報復(отместие)を受けたのである。

ヤーニが自分の故郷への帰途についていたとき¹⁹¹⁾、次の夜に、熊が〔カシワの樹に〕よじ登り、かれらをかみ裂いて食べてしまった¹⁹²⁾。

このように二人は、悪鬼のそそのかし¹⁹³⁾によって滅びたのである。〔二人は〕他人のことは〔未来を〕見通したり、占ったりしても、自分たちの破滅を知ることはなかったのである。

もし二人が〔自分たちの破滅を〕知っていたとしたら、捕まるような場所に来なかった¹⁹⁴⁾

187) 「運搬人」(повозники)とは、ヤーニのような公の徴税人の命令によって、徴収した貢税品の運搬の賦役を課された者(在地の平民)のことを指している。ペロオゼロで徴税された貢税品と捕縛された二人の呪術師をヴォルガ川(シエクナ川河口)まで運んできたのだから、当然ペロオゼロの住民である。〔ノヴゴロド第一年代記(1):注503〕を参照。なお、チェレブニンはこの「運搬人」は「共同体に割り当てられた貢税の運搬に責任を負う人物で、郷における富裕な人間であり、この階層から土地の領主(феодал)が出ていた」〔Черепнин 1965: С. 184〕と踏み込んだ考察をしている。呪術師に殺されたのが「身分の高い女たち」(лучшая жены)〔上注151〕だったことから、その可能性もあるだろう。

188) 上注179で指摘したように、このヤーニの言葉には、殺人者に対する血族による復讐(血讐)は許されるという慣習的な解決の方法が踏まえられている。

189) ここに、*ПВЛ* 全写本、*H4*、*HKI* では *иному роженне/родичь* (また別の者は近親者が)の句があるが、*HKI-M*、*CI* にはない。おそらくこの句がある前者が本来の読みで、後者は初期の編集段階での句の削除によるものではないか。

190) 血讐によって殺された殺人者を「カシワの木に吊す」(повѣсити на дубе) ことについては、フロヤノフによれば、住民は呪術師たちが遺体を尊んで、かれらにとって神聖な樹木であるカシワの枝の間に葬ったのだが、年代記者はそれを否定的な言葉で表現したとしている〔Фроянов 2012: С. 113〕。しかし、このエピソードはヤーニの言葉を記述したものであり、かれの一連の行為の目的の一貫性から見れば(上注164)、呪術師の権威を貶めるための示威的措置と考えるべきだろう。

191) ヤーニは当時キエフ公だったスヴァトスラフ〔C〕によって派遣されていたとすれば(上注159)、徴税の業務を終えて、貢税品とともにキエフへ向かったと考えられる。

192) ここでヤーニは、呪術師に対する懲罰を、他のエピソード(例えば〔№209〕)のようにキリスト教的な力によって行うのではなく、民衆にとって受け入れやすい土着的な方法を用いていることは興味深い。ヴォローニンが指摘しているように、第一に、ヤーニは、在地の慣習法としての親族による復讐(血讐)に訴えている。これは、同時代の『ルーシ法典』で極力避けようとした方法だった。第二に、呪術師を樅の木に吊るして熊に食わせるとするのは、熊を神格化していた民衆のにとっては過酷な一種の神罰として映ったと考えられ、やはり土着的な処罰法である〔Воронин 1960: С. 77〕。

193) 「悪鬼のそそのかし」は *HI-M*、*CI* бѣсовскимх наущением; *III* наущениемъ дьяволимь; *Лер*、*HKI* наущеньемъ бѣсовскимъ, *Рдз*、*Акд* наущениемъ бесовскимъ; *H4* учениемъ бѣсрвскимъ と異読がある。

194) 二人の呪術師は、ヤーニの脅迫に怯えたペロオゼロ人の手で、おそらく計略によって捕らえられ、ヤーニに引き渡されたのだろう(上注173参照)。

はずである。捕まったとしても、なぜ二人は、「われら二人は死ぬはずがない¹⁹⁵⁾」などと言ったのだろうか。かれ〔ヤーニ〕はこの二人を殺そうと考えていたのに。

だが、見よ、これは悪鬼のそそのかしなのである。悪鬼どもは人間の考え(мысль)を知らない。しかし、人間に企み(помысл)を吹き込むのである。〔神の〕神秘を知らないにもかかわらず。神だけが、人間の思慮(помышление)を知っている。なぜなら、悪鬼どもは何も知らないからである。〔悪鬼どもは〕無力で〔195〕外見が醜い¹⁹⁶⁾のである。さあ、それでは、外見と陰気さについて物語ろう。

【悪鬼のそそのかしについての訓話（3）：ノヴゴロド地方の呪術師について：1071年頃】 [№ 208]

この時期に、この年の頃に¹⁹⁷⁾、あるノヴゴロド人がたまたまチューヂ人のところ¹⁹⁸⁾ (в чюдь)に行くことになった。かれから呪術(вольхвованиа)を行ってもらおうと妖術師(кудесникъ)のもとにやって来た。かれ〔妖術師〕は自分の習慣に従って、部屋に悪鬼ども(бъсы)を呼び寄せようとした。

ノヴゴロド人がその部屋の敷居の上に座っていると、妖術師は麻痺して横たわっていたが、一匹の悪鬼(бъсь)がかれを打ち始めた¹⁹⁹⁾。そして、妖術師は立ち上がり、ノヴゴロド人に言った。「神々は来ることができない。あなたは何か身につけている。〔神々=悪鬼どもは〕それを恐れているのだ」。かれ〔ノヴゴロド人〕は身につけていた十字架のことを思い出し、出て行って部屋の外に置いた。かれ〔妖術師〕は再び悪鬼どもを呼び寄せ始めた。悪鬼どもはかれ〔妖術師〕に妄念を起こさせ²⁰⁰⁾ (мечтавшe), 何のためにかれ〔ノヴゴロド人〕がやってき来たのか

195) 上の叙述に、呪術師が「われら二人は死ぬはずはない」(не умрети нама)と言ったとは直接には書かれていないが、ここでは、二人がヤーニに対して繰り返し言った「われらはスヴァトスラフの前に立つべきである」(上注179)の言葉の内容を指しているのではないか。

196) 「無力で外見が醜い」(немощнѣ и худѣ взоромъ)は下注201の箇所の表現と対応している。

197) 「この時期に、この年の頃に」(в си бо времена и в лѣта)のように、времяとлѣтоを複数で用いるときには、時期や年の範囲が広いこと、すなわち、出来事が起きた時がはっきり特定できないことを意味している。

198) 「チューヂ人」(чюдь)は、バルト・フィン系の部族(エストニア人、ヴェプス人、イジョラ人、コレラ人など)に対するスラブ人から見た集合的な呼び名。ノヴゴロド人(スロヴェネ人)とは西辺で居住地が接していた。現在エストニアとロシアの境にあるチューヂ湖(Чудовское озеро)(ペイプシ湖)の名称はこの部族名にちなんでおり、この一帯はチューヂ人が居住していた。

199) 「悪鬼がかれを打つ」шибе имъ бѣсьとは、悪鬼が妖術師に憑依して、体を床に打ち付けるようにさせること。

200) *Км мечтавшe им; Ак мѣчтавшe им; ПВЛ, НСГ* 諸写本 мечтавшe им(かれを強く打つ)と異読があるが、造格補語 им をとり、直前に шибe имъ бѣсь(悪鬼はかれを打ち始めた)(前注)の句があることから、この強意の言い換えである мечтавшe им が本来の読みだろう。мечтавшe(妄念を起こさせる)は、先行の表現から影響を受けた二次的な改変によるもの。

について語った。

その後で〔ノヴゴロド人は〕妖術師に訊ねた。「どうして〔悪鬼ども〕は身につけている十字架を恐れるのですか」。すると、かれ〔妖術師〕は言った。「それは天の神のしるしだからだ。まさにそれをわれらの神々は恐れるのだ」。かれ〔ノヴゴロド人〕は言った。「では、あなたがたの神々とはどういうものですか？ どこに住んでいるのですか？」かれ〔妖術師は〕言った。「われらの神々は深淵に住んでいる (в безднахъ)。姿形は黒くて翼があり、尾を持っている。天の近くまで昇ることもある。あなたがたの神々の言うことを聞いている。それは、あなたがたの神々が天上にいるからだ。もしもあなたがたの人々のうち誰かが死ねば、天に運びあげられるだろう。もしもわれらの人々〔のうち誰かが〕が死ねば、われらの神々のもとへ、深淵へと運ばれるのだ」。

まさにその通りである。罪びとたちは地獄にいて、永遠の苦しみを待っている。他方、義人たちは天使たちとともに天の居所に住まいを得ている。

【悪鬼のそそのかしについての訓話（4）】 [№ 209]

悪鬼における力と美しさ、無力²⁰¹⁾は、このようなものである。このようにして〔悪鬼どもは〕人間たちを惑わし、かれらに幻視 (видѣния) を語るよう命じ、かれらの前に現れる。〔すなわち〕信仰が完全でない者たちに夢 (сонъ) のなか現れる。またある者には妄念 (мечьста) のなかに現われる。こうして悪鬼のそそのかしによって呪術を行うのである。

悪鬼の呪術 (бѣсовская волшебница) はより多く女たちによって行われる。太古に悪鬼が女〔エヴァ〕を惑わし、その女が自分の男〔アダム〕を〔惑わした〕からである。

このように今の時代でも、女たちは魔術 (чародейство) や毒 (отрава) やその他の悪鬼の術 (козни) を用いて多くの呪術を行っている (волхуютъ) のである。

だが、男たちもまた悪鬼によって惑わされる。不信仰の者たち〔のことである〕。たとえば最初の時代、使徒たちのいた頃に魔術師シモン²⁰²⁾ (Симонъ волхв) がいた。かれは呪術

201) 「悪鬼における力と美しさ、無力」(бѣсовская сила и лѣпота и немощь) は、上注 196 の「無力で外見が醜い」(немощиѣ и худѣ взоромъ) の表現に対応しており、「力と美しさ」(сила и летота) は、「悪鬼における」(бѣсовская) がつくことで価値が逆転し、「非力と醜さ」の意味で理解される。

202) 「魔術師シモン」(Симон волхв, Σίμων ὁ μάγος) は『使徒言行録』8:8-25 に登場する人物。ただし、以下のエピソードは正典にはなく、新約の外典『ペトロとシモンの論争』(Слово прения Петрова с Симоном) の中に、ローマに行ったペトロが、呪術師シモンの家に行くと、その門前に大きな犬がいて通さなかった。ペトロは犬にシモンに來訪を告げるように命じ、出て來たシモンは、犬に人間の言葉を喋らせて、入るように言った。その後、二人は論争を行いペトロが勝った、というエピソードがある [Франко 1902: С. 12-13]。これは、『ゲオルギオス・モナコス (ハマルトロス) 年代記』のスラブ訳にも収録されており [Истрин 1920: С. 252-253] これからとられていることは明らかである。

(волшество)を用いて、犬が人間の言葉を話すようにさせ [196]、自分もまた時には老人に、時には若者に姿を変え、またある時には別人の姿に変えたりした。そのようなことは妄念の中で行っていたのである。

ヤンネ (Аини) とヤンブレ (Абри) はモーセ (Моисѣи) に対抗して²⁰³⁾呪術によって奇跡を[行った]²⁰⁴⁾。

キュノパス²⁰⁵⁾ (Конопъ) もまた悪鬼の妄念を使って水上を歩き、悪鬼に惑わされて別の妄念を用いて、自分と他の者たちを破滅させたのである。

【悪鬼のそそのかしについての訓話（5）：ノヴゴロド公グレーブ [C1] による呪術師退治の物語：1071 年頃】 [№ 210]

グレーブ²⁰⁶⁾ [C1] の時代にまた²⁰⁷⁾呪術師がノヴゴロドに現われたことがあった。かれは神のように装って人々に語り、多くの惑わしをなした。ほとんど城市全体[を惑わした]。かれは「あらゆることを予知できる」と言い、キリスト教の信仰をけなして、「みなの人々の前でわしはヴォルフ川 (по Волхову) を渡ってみせよう」と言った。そこで城市に騒乱が起り、すべての人々

203) 呪術師のヤンネとヤンブレ (Ианний и Иамврий) についての典拠は『テモテへの手紙 2』3:8-9 参照。

なお、モーセがエジプトで呪術師たちと対抗したことについては『出エジプト記』第 8 章等に記述がある。

204) この箇所には *ПВЛ* では、но вскорѣ не възмогоста (противу) Моисіови の文言があるが、*Н1-М* 全写本にはない。前者が本来の読みで、後者は後代の削除による可能性が高い。

205) キュノパス (Куноп: Κύνωπας) は、『使徒・福音書記者、神学者ヨハネ伝』(Житие святого апостола и евангелиста Иоанна Богослава) の Чудо о Кунопѣ に登場するパトモス島に住んでいた呪術師のこと。『ヨハネ伝』(Житие) にはこれに対応するエピソードがある [ВМЧ Сен. 25-30: Стб. 1626-1635]。

206) グレーブ公 [C1] は、1064 年までトムタラカンに公座を得ていたが、ロスチスラフ [A1] によって追い出され、父スヴァトスラフ [C] がいたチェルニゴフに身を寄せていた。その後、1067 年頃に洞窟修道院出身のニーコンの懇請によってトムタラカンの公座に復位した (1068 年の年代が記されている「トムタラカン石碑」に「グレーブ」の名がある [Энциклопедия СПИ-5: С. 122-123])。さらに 1069 年 5 月以降に、おそらくキエフ公に復位した ([№ 198] 参照) イジャスラフの要請によって、ノヴゴロドに公座を移したと考えられる。グレーブは 1069 年～1078 年の長期間にわたってノヴゴロドを公支配した。ただし、1074 年の記事 [№ 216] によれば、洞窟修道院典院フェオドーシイの死の際にかれはキエフにいることから、常にノヴゴロドに身を置いていたわけではなく、代官を置いて支配していた時期もあったのだろう。かれは、1078 年にノヴゴロドの公座を追放されたあと、その年の 5 月にヴォルガ河畔で殺害されている。

207) シャフマトフおよびリハチョフによれば、この記事は、*СНк* の編者ニーコンが、グレーブ・スヴァトスラヴィチ公 [C1] からの聞き書きをもとに作成したものとしている [Шахматов 2002: С. 306] [Лихачев 1986 (1945): С. 125]。その場合、テキストは *СНк* ⇒ *КНС* ⇒ *Н1-М* と伝わったことになる。

がかれを信じた。そして、主教フェオドール (Федор)²⁰⁸⁾ を打ちのめそうとした。

主教フェオドールは尊い²⁰⁹⁾ 十字架²¹⁰⁾ をとり、祭衣 (ризы) をまとい、人々の前に²¹¹⁾ 立ってこう言った。「呪術師を信じたいと思う者は、かれに従って行くがよい。もしも〔神を〕信じる者は、十字架のもとに来るがよい」。人々は二つに分れ、グレーブ公 [C1] とかれの従士たちは主教の側に立った²¹²⁾ が、人々はすべて呪術師に従った。そしてかれらの間に大きな騒乱が起った。

グレーブ [C1] は斧²¹³⁾ を着物の裾の下に隠し持ち、呪術師のもとに来てかれに言った。「朝に何が起こり、また夕べに何が起るかをお前は知っているか²¹⁴⁾」。かれは〔答えて〕言った。「あらゆることを予知できる」。そこでグレーブ [C1] は言った。「今日、何が起るかをお前は知っているか」。呪術師は言った「わしは大いなる奇蹟を行うのだ」。すると、グレーブ [C1] は斧を取り出して、かれ〔呪術師〕を伐り割いたので、かれは倒れて死んだ。人々は散り散りになった。かれは、悪魔 (диавол) に身を売って、肉体も魂も滅ぼしたのである。

208) ニカ所の「フェオドール」(Федор)の人名は、*ПВЛ*になく、*Н1-М*、*НСГ* 諸写本にはある。前者が本来で、後者は補筆による可能性が高い。なお、フェオドールのノヴゴロド主教在位は、1069年10月24日～1077年だった。

209) *Км* は честный (尊い) が付されているが、これはこの系統だけの固有読み。

210) この十字架は以下のエピソードで重要な役割をはたすが、*Н1-С* 6577(1069)年の記事には、(1069/70年冬のフセスラフ [L] との戦いに勝利した日の)「翌日にウラジーミル [06] の尊い十字架がノヴゴロドの聖ソフィア教会で見出された。主教フェオドールの時である」(А заутрие обрѣтесе крѣст честный Володимиръ у святѣи Софие Новѣгородѣ, при епископѣ Федоре)とある。状況から見て、主教フェオドールがここで手にしている十字架は、この「ウラジーミルの十字架」(крест Владимиръ)であると考えられる(上注102および129を参照)。

211) *Км* ста пред народомъ; *Н4* ставъ посреди народы; *Ак*, *Бр*, *Ип*. *Лер НК1*, *С1* стаの異読がある。最初の二例は説明的補足によるもので、最後の例が本来の読みである。

212) *Н1-М* 全写本と *С1* стаща у епископа だが、*ПВЛ*, *Н4*, *НК1* идоша и стаща у епископа (行って、主教の側に立った)の異読がある。

213) 「斧」(топор)が呪術師に対抗するための武器として霊的な力を持つとされていたことについては、ヤーニの行動についての上注167を参照。

214) ここには、呪術師に自分の身の上で起こることを占わせた上でこれを殺し、偽予言者であることを暴くという、モチーフを見ることができる。

6582(1072)年

【ヴィシェゴロドにおける聖ボリスと聖グレーブの改葬式：1072年5月2日】 [№ 211]²¹⁵⁾

聖なる受苦者ボリス [14] とグレーブ [15] の〔遺骸が〕移された²¹⁶⁾。

ヤロスラフ [13] の子どもたちである、イジャスラフ [B], スヴァトスラフ [C], フセヴォロド [D], またその時の²¹⁷⁾ 府主教ゲオルギイ²¹⁸⁾ (Георгин),²¹⁹⁾ ペレヤスラヴリの主教ペト

215) このボリスとグレーブの改葬式の記事には、Сказание чудесь святою страстотерпцю Христову Романа и Давида と題されている『奇跡物語』の О препесении святою мученику の部分に、本記事と対応するテキストがある [Абрамович 1916: С. 55-56][Милютенко 2006: С. 324-326]。諸研究およびテキスト学的検討から、本記事はこのテキストを年代記記事用に削除、補足して作成されたことは明らかであることから [Шахматов 2002 (1908): С. 58-59][Поппэ 1995: С. 22-23]、以下の注釈ではこれを〈典拠〉として、二つのテキストを比較対照しながら検討していく。なお、ボリスとグレーブについての聖人伝史料とその研究については [栗生沢 2015 : 5-3-518] に詳しい紹介がある。

216) 本記事には、改葬式がどこで行われ、どこから聖骸を移したのかについて書かれていない。『奇跡物語』および『講話』(Чтение о Борисе и Глебе)によれば、ボリスの遺骸は、殺害されたアリタ川からヴィシェゴロドの聖ヴァシーリイ教会にヤロスラフ賢公 [13] の手で移されていた。さらに、スモレンスクのスミャディニ川で発見されたグレーブの遺骸も同じ教会に移された。その後、聖ヴァシーリイ教会が焼けたので、ヤロスラフは同じ場所にボリス＝グレーブの名の礼拝堂(клетка)を立てて遺骸を移した。そして、20年の時を経てこの教会が古くなったために、イジャスラフ公 [B] が木造の聖堂を新たに建設し、そこへ二人の聖骸を改葬する儀式が1072年にとり行なわれたのである。

217) 「その時の」は異同があり *Км бѣ в то время, Ак, Бр, Лер* тогда бѣ; *Ип бѣ* тогда; *Рдз* なし。*Км* の読みは後代の二次的なもの。いずれにせよ、この表現は、本記事が1072年から時間が隔たった時点で書かれた(編集された)ことを示している。下注234も参照。

218) 「府主教ゲオルギイ」(ギリシア語名ゲオルギオス(Γεώργιος))はビザンツから渡来したギリシア人で、1062年頃から府主教として在職。1073年記事で、府主教は「ギリシアにいた」(下注248)とあることから、この改葬式の後にまもなく(1072/73年)コンスタンティノポリスに帰国したと考えられる [Карпов 2017: С. 83-84]。

219) この参加した主教たちのリストは〈典拠〉の『奇跡物語』と異同がある。〈典拠〉では、府主教について「もう一人の〔府主教〕チェルニゴフのネオフィト」(други Неофитъ Чърниговьскыи)とあり、次に「ベルゴロド〔主教〕ニキータ」(Никита Бѣлогородьскыи)の名があるが、年代記の諸版にはない。ネオフィトの削除については、スヴァトスラフとの関係が悪かった年代記記者(下注229参照)が、スヴァトスラフによって擁立されていたチェルニゴフの府主教の名を忌避して削除した可能性がある [Ужанков 2000: С. 41]。ニキータの名の削除の意図については不明。

ル²²⁰⁾ (Петръ Переяславський), ユーリエフのミハイル²²¹⁾ (Михаиль Юрьевський), 洞窟修道院典院フェオドーシイ (Феодосии), 聖ミハイル〔修道院〕典院ソフロニイ²²²⁾ (Софронии святого Михаила), 典院ゲルマン²²³⁾ (Германъ игумень), および²²⁴⁾, それ以外の典院たちが集まり, [197] 輝かしい祭りをを行った。

かれら〔の遺骸は〕新しい教会²²⁵⁾に安置された。この教会はイジャスラフ [B] が創建したもので、今も建っている²²⁶⁾。

先ず初めに、イジャスラフ [B], スヴァトスラフ [C], フセヴォロド [D] が、木の棺に入っ

220) ペレヤスラヴリの主教座はルーシでもっとも初期に設置された主教座の一つであり、1072/73年に府主教が不在になってから(下注248)11世紀末まで、実質的な府主教座(титулярная митрополития)になっていた。「ペトル」についてはこの記事以外に史料に言及はない。

221) ユーリエフは、ロシ川河岸におそらくヤロスラフ賢公[13]によって建てられ、公の洗礼名にちなんで命名された城市。1036年以降に主教座が置かれた。主教ミハイルは、1073年の洞窟修道院の教会の定礎式に、府主教の代理として参加している(下注247)。ユーリエフの主教座の序列が高かったことが分かる[Карпов 2017: С. 299]。

222) ソフロニイは、キエフのヴィドゥビチのミハイル修道院の典院[Карпов 2017: С. 393]。『洞窟修道院フェオドーシイ伝』では、ソフロニイが、洞窟修道院で太陽のように輝くフェオドーシイの姿を目撃したと記されている[БЛДР Т. 1: С. 384]。

223) *ПВЛ, С1*では「典院ゲルマン」(Германъ игумень)のあとにсвятого Спаса(聖救世主修道院の)の語が付されている。この修道院は、1096年記事で「ゲルマンの修道院」(Герьманы, Германечь)と呼ばれている。ベレストヴォにあった聖救世主修道院のことを指していると考えられる[Комментарии к ПВЛ 1950: С. 406]。

224) この箇所には、*ПВЛ*の対応記事ではすべて、Никола, игумень Переяславськийがあるが、*Н1-М*にはない。これは*Н1-М*の編集過程における脱落と思われるが、意図的なものかどうかは不明。なお、このニコライは、スーズダリ年代記1126年記事にあるペレヤスラヴリのヨハネ修道院の典院を指していると思われる[Карпов 2017; С. 328-329]。

225) この「新しい教会」(новая церковь)は、何に対して「新しい」のか本記事からは分からないが、〈典拠〉の『奇跡物語』を参照すれば、「20年経って、教会はすでに古びたことから、イジャスラフ [B] は二人の受苦者の新しい教会、一つ屋根〔の聖堂〕を建築することを考えた」(И минувшем летом 20, и църкви уже обетьшавъши, и умысли Изяслав възградити църковь нову святыима страстотърпыцема, в върх в один). とあることから、1052年にヤロスラフ賢公が建てた「古くなった」ボリスとグレーブの教会に対して「新しい」ことが分かる。

226) この段落は年代記記者による〈典拠〉の『奇跡物語』への補足。これによってイジャスラフ [B] が改葬の儀式を主導したことが分かる。かれがキエフの公座に復帰したのが、1069年5月2日のことであり[№ 198], この儀式がちょうど3年後の同じ日である1072年5月2日に行なわれたとされていることから、イジャスラフが兄弟との「親愛」(любовь)を深めることで、自らのキエフの統治を固めるために、教会建設と儀式を企画したことは明らかだろう。

この「今も」(ныне)はこの記事が書かれた(編集され、記事として挿入された)時点ということになるが、1074年頃の*СНк*編者の言葉と考える説[Каргер 1958: С. 14]があり、それに対して、儀式から20~30年後、すなわち、*КНС*の成立の時点と考える説がある[Комментарии к *ПВЛ* 1950: С. 407]。

たボリス [14] を持ち上げた。持ち上げて、肩に担いで運んだ。修道士たちが両手に蠟燭を持って先導し、かれらの後には輔祭たちが香炉を持ち、その後に司祭たちが、そしてかれらの後には、主教たちが府主教とともに〔進んだ〕。そして、これらの者たちのあとに〔公たちが〕棺を〔担って〕進んだのである。

〔一行が〕新しい教会に運んで来て棺を開けると、教会は芳香と妙なる匂いに満ちた。〔人々は〕これを見て神を讃えたが、府主教は恐怖にとらわれた。かれは二人への信仰が固まっていなかったからである²²⁷⁾。そこでかれは地に伏して許しを請うた。そしてかれ〔ボリス〕の聖骸(моши)に接吻した。それ〔聖骸〕が石棺に安置された。

その後で、石棺に入ったグレーブ [15] が運び出された。櫓に乗せ、2本の綱をもって運んだ。〔人々が〕戸口のところまで来ると棺がとまって動こうとしなかったので、民衆に「主よ、憐れみ給え」²²⁸⁾と唱えるように命じると、これが動き出した²²⁹⁾。

227) この場面は、ギリシア人である府主教ゲオルギイが、ルーシの二人の公を列聖することに積極的ではなかったが、二人が奇跡を顕わして府主教を改悛させたエピソードとして、ルーシ人の修道士(洞窟修道院出身者ネストル?)がことさらに書き記したと解釈されている。

228) 「主よ、憐れみ給え」(Господи, помилуй) は、ギリシア語の Κύριε ἐλέησον のスラブ訳で、聖体礼儀の連祷などで、祈願への応答として繰り返す聖歌隊によって唱和され、広く親しまれた短い祈禱句。それが、民衆が一斉に神に祈願する場面使われるようになったのだろう。

229) この記事は、〈典拠〉の『奇跡物語』をもとにしていることから、聖骸にかかわる二つの奇跡(「遺骸からの芳香」と「遺骸を積んだ櫓が止まる」)が記されているが、この箇所にはもう一つの奇跡のやや長い記述がある。記事では省略されているが、以下に〈典拠〉の該当部分を訳出する。

「府主教ゲオルギイは聖グレーブの腕〔の骨〕を手にとると、イジャスラフ公とフセヴォロド公を祝福した。スヴァトスラフは、聖人の腕をもった府主教の手を掴んで、〔自分の〕病気の部分に押し付けた。病気によって首筋、両目、こめかみが痛かったのである。その後、腕は棺の中に置かれて、聖体礼儀の聖歌が始まった。スヴァトスラフはベルン(Бьрн)〔おそらく配下の貴族〕にこう言った。『頭が何かで押されているようだ』。ベルンは公〔の頭〕から被り物(клобукъ)を取ると、聖人〔グレーブ〕の爪が見えた。〔ベルン〕は〔公の〕頭からそれを剥ぎ取って、それをスヴァトスラフに渡した。かれ〔スヴァトスラフ〕は二人の聖人に感謝して、神を賛美した」[Абрамович 1916: С. 56]。

ここには、スヴァトスラフ公 [C] の、聖グレーブへの特別な尊崇を見ることが可能で(ちなみに、『講話』では「ボリスの腕」のエピソードになっている)、グレーブはチェルニゴフ公家(のちのオレーゲー族)の守護聖人となったとする説もある[Ужанков 2000: С. 40]。

なお、このエピソードが本記事で削除されたのは、おそらく、年代記記者が所属する洞窟修道院との関係が悪かったスヴァトスラフ [C] がかわる奇跡だったことによるだろう。

こうしてかれらを5月2日²³⁰⁾に安置したのである。

〔諸公の〕兄弟たちは聖体礼儀を終えると、それぞれ自分の貴族たちを従え、大いなる親愛をもってともに食事をした²³¹⁾。

この時、ヴィシエゴロドはチューデン²³²⁾ (Чюдин) が、〔この〕教会はラザリ²³³⁾ (Лазарь) が統括していた²³⁴⁾。

この後〔兄弟諸公は〕それぞれ帰途についた。

[6580(1072)年 ポリス [14] とグレーブ [15] がアリタ [川] からヴィシエゴロドへ移され

230) この日付については、*НІ-М, Лер, Рдз* が5月2日だが、*Ин, Хлб* は5月20日と異同がある。〈典拠〉の『奇跡物語』には「これ以来、この祭りは5月20日に確定し、二人の殉教者を讃美し尊ぶことになった」と記されており、『講話』もまた20日を示していることから、5月20日の日付が本来である可能性が高い。ただし、1115年に行われた二度目の改葬は、5月2日に行われており [ПСРЛ Т. 1: Стб. 280]、実際には5月2日だった可能性もある (上注226を参照)。この日が日曜日であることもその可能性を高める [Комментарии к ПВЛ 2012: С. 356]。

なお、ウジャンコフは「5月2日」の誤った日付が書かれたのは、本記事の作者が1115年記事を参照した (つまり、本記事は1115年以降に書かれ、作者はヴィドゥピチ修道院のシリヴェストルである) ことによるとしているが [Ужанков 2000: С. 36-37][Ужанков 2001: С. 39]、本記事は基本的に〈典拠〉を改変して作成されており (上注215)、日付だけ1115年記事に拠ったとするのはあまりにも不自然である。

231) 「食事をした」(объдаша) は文脈から見て、聖体礼儀の聖体を拝領することを指している可能性もある。ここでは、「ともに」(все на купь) が強調されており、親愛(любовь)と親和(мир)の象徴的な表現になっている。

232) 「チューデン」は『ルーシ法典(簡素版)』第19条冒頭の、法典を制定するために集まった貴族の一人として言及されている [ノヴゴロド第一年代記(3): 注221]。かれの兄弟トゥークイがイジャスラフ [В] の配下だったこと (上注80)、キエフの付属都市であるヴィシエゴロドを統括(держати)していたことなどを考え合わせると、当時のキエフ公イジャスラフの配下の貴族だったと思われる。1015年にスヴァトボルク [07] がボリス公 [14] 排除のためにヴィシエゴロドの筆頭貴族プートシャを頼ろうとしたエピソード [№ 128] から分かるように、古くから、ヴィシエゴロドの行政の統括はキエフ公が特に信頼を置いていた有力な貴族に委ねられていた。

233) 「ラザリ」という人物は、〈典拠〉の『奇跡物語』の第5の奇跡物語の中で、ボリスとグレーブ教会の「教衆の長」(Иже бѣаше старѣшина клирикомъ църкве тоя) とされている [Абрамович 1916: С. 58]。さらに、*ПВЛ* 1088年記事に、ヴィドゥピチ(ミハイル)修道院の典院のラザリが言及されており、これと同一人物である可能性がある。その場合、かれは1105年からベレヤスラヴリの主教を務め、1117年に没している。また、1115年にヴィシエゴロドで行われたボリスとグレーブ両公の二度目の改葬にも出席している [Карпов 2017: С. 249-250]。

234) この段落の文言は〈典拠〉の『奇跡物語』にはなく、年代記記事の記者による、出来事が起こった場所の「責任者」を明示するための補足部分である (上注226参照)。

た²³⁵⁾]

【スヴァトスラフ [C] とフセヴォロド [D] の謀議によって、イジャスラフ [B] は追放されてポーランドへ行く。スヴァトスラフ [C] がキエフの公座に就く：1073 年 3 月 22 日】 [№ 212]

6581(1073) 年

悪魔 (диаволь) が兄弟たちのなかで争いを煽り立てた。このヤロスラフ [13] 息子たち (Ярославици) は、互いに大いなる仲間割れを起こした。スヴァトスラフ [C] がフセヴォロド [D] とともに、イジャスラフ [B] に対立したのである。イジャスラフ [B] はキエフから出た²³⁶⁾。

[6581(1073) 年 この年、スヴァトスラフ [C] とフセヴォロド [D] はイジャスラフ [B] をリヤヒ [ポーランド] 人のもとへと追放した]

スヴァトスラフ [C] とフセヴォロド [D] の二人はキエフに入った。3 月 22 日だった。〔二人は〕ベレストヴォ (Берестово) の公座についた²³⁷⁾。父の戒めに背いたのだった。スヴァトスラフ [C] は、より大きな権力を望んで、兄弟を追放するという先例をひらいた²³⁸⁾。

かれ〔スヴァトスラフ〕はフセヴォロド [D] を騙して、こう言ったのだった。「イジャスラフ [B]

235) 対応する *HI-C* の記事は短く、原文は *Перенесена быста Бориса и Глѣба съ Льга Вышегороду* で、これによれば、ボリス公が殺害された現場であるアリタ川の礼拝堂に埋葬されていた遺骸が、ヴィシェゴロドへ移されたとされている。しかし、上注 216 のように、これは事実に対応していないと思われる。

236) このスヴァトスラフ [C] とフセヴォロド [D] によるイジャスラフ [B] 追放の政治的動機・背景については、[栗生沢 2015 : 752-753 頁] を参照。

237) 「ベレストヴォ」についてはウラジーミル [08] の妻妾についての [№ 76] に最初の言及があり、村 (селищи) とされている。ウラジーミル公以来の居館 (двор князь) があり、公自身もここで臨終を迎えた場所。この「二人はベレストヴォの座に就いた」(и съдоста на Берестовѣмъ на столѣ,) の句には、定型的な *на столѣ отнѣ (отца своего)* (父の公座に) の表現が使われていないが、これは、著者の二人の公座就位に対する批判的姿勢の反映だろう。

238) 「父の戒めに背いた……」以下の部分は、ヤロスラフ [13] の息子たちへの遺言 [№ 162] の中で述べられている「兄弟に対して兄弟の領域を犯したり、追い出したりしないように戒めた」の文言を明らかに参照している。

は、われら二人に対抗して、フセスラフ [L] と縁組を結ぼうとしています²³⁹⁾。もしも、われらが、かれに先んじなければ、かれはわれら二人を追放するでしょう」。こうして、かれ〔スヴァトスラフ〕はフセヴォロド [D] をイジャスラフ [B] にけしかけた。

イジャスラフ [B] はポーランド人のもとへ行った。多くの財産と [198] 妻²⁴⁰⁾ を伴っていた。多くの財貨を当てにしていたのである。かれは、「これによって軍兵を手に入れよう」と言っていた。しかし、ポーランド人は、そのすべてをかれから奪い、かれ〔イジャスラフ〕に自分たちのもとの道を示した²⁴¹⁾。

【スヴァトスラフ [C] がキエフの公座に就く。神の戒めについての訓話：1073 年 3 月 22 日】 [№ 213]

スヴァトスラフ [C] はキエフに座した。自分の兄を追放して、父の戒めに違反し、なによりも神の戒めに〔違反した〕のである。自分の父の戒めに違反するのは大きな罪である。

なぜなら、はじめにハムの子ら (сынове Хамовъ) がセツの地 (земля Синова) に侵入したが、4 百年の後に神から報復²⁴²⁾ を受けたからである。〔すなわち〕セツの一族から (от племени

239) 「縁組を結ぶ」の сватится (Ии, Рдз сватається) の語の本来の意味は、「子供、兄弟姉妹の結婚を通じて姻戚関係を結ぶこと」であり、リハチョフ訳や 1987 年版邦訳にあるような単なる協定・同盟ではなく、婚姻によって強められた同盟関係が想定されている。

年代記記者はこの発言を「悪鬼のそそのかし」によるとしているが、イジャスラフ [B] は息子ヤロボルク [B2] をクニクンデと結婚させ、のちに娘エウブラクシアをポーランドのボレスワフ二世に嫁がせるなど、婚姻同盟に積極的な公だったことから、一定の信憑性があると見るべきだろう。

その場合、イジャスラフはポロツク公フセスラフ [L] と長年にわたって深刻な対立関係にあったことから、婚姻同盟によって信頼性のある可能な限り堅固な和議を模索していたと考えることは十分に可能だろう。実際に、12 世紀には敵対関係にある諸公の間でそのような形の和議が多かった。さらに、後年のことになるが、1086 年頃に、イジャスラフの息子ヤロボルク [B2] の娘が、フセスラフ [L] の息子グレーブ [L5] と結婚しており、これはイジャスラフ公 [B] から続いていた一族とポロツク公家との婚姻同盟模索の結実とも解釈することが可能である [Литвина, Успенский 2013a: С. 318-321]。

240) イジャスラフの「妻」(жена) とは、ポーランド王ミェシユコ二世の娘のゲルトゥルーダ (Gertruda MieszkoŃna) である。

241) 「自分たちのもとの道を示す」(показавше ему путь от себе) とは、年代記特有の表現で、相手を受け入れずに退去を求めること。この文の主語は「ポーランド人」(ляхове) になっているが、財産を奪い、受け入れを拒んだのは、当時のポーランド公ボレスワフ二世 (前注ゲルトゥルーダの甥にあたる) だった。ポーランドを追われたイジャスラフは、ドイツ皇帝ハインリヒ四世の宮廷に向かい、そこから息子のヤロボルク [B2] をローマに派遣して教皇グレゴリウス七世の助力を求めたが成功しなかった ([栗生沢 2015: 691-693, 725, 802-803 頁] 参照)。

242) この「400 年後の報復」(по лѣтѣх 400 отмщение) の 400 年については、『創世記』15:13 節の神のアブラハムへの言葉に「おまえの子孫は自分たちのものでない土地に仮寓する者となり、400 年のあいだ、奴隷としてかれらに仕え」とある部分をおそらく典拠としているだろう。さらに、『出エジプト記』12:40 には「イスラエルの人々がエジプトに住んでいた期間は 430 年であった」とある。

…Сифова) ヘブライ〔ユダヤ人〕(еврѣи)が出ている²⁴³⁾。かれら〔ユダヤ人〕はカナンの一族(Хананѣиско племя)を滅ぼして自分の取り分と自分の地とを手に入れたのである²⁴⁴⁾。

更にエサウ(Исавъ)が自分の父の戒めに違反して殺された²⁴⁵⁾。他人の領域を違反〔侵犯〕することはよいことでないからである。

243) この「セツ(シフ)の一族からユダヤ人(еврѣи)が出ている」ことについては、たとえば『註解旧約抄録(パレヤ)』[Палея Толковая]に、И бысть же Сифъ мужъ праведень. Сему въдана бысть еврѣйская писмена. (セツは義人で、〔神は〕かれにユダヤ〔ヘブライ〕の文字を与えた) [Палея Толковая 1892: л.49в]との文言がある。さらに、外典『パトラの聖メトディオスの啓示』(Откровение Мефодия Патарского) (初版スラブ訳)の冒頭には родисе Сить в 30-ное лѣтъ мужъ жидовинь по образу Адамову. ([アベルの死後] 30年目にセツが生まれた。アダムをかたどったユダヤ人の男だった) [Истрин 1897: С. 84]の文言が見つかる。これらの文言と関連する可能性もあるが、典拠としてはやや薄弱である(次注を参照)。

244) この段落の部分は、全体としてユダヤ人が、「カナン」を取り戻して王朝を建ててに至った歴史について語っている。

まず「ハムの子ら」(сынове Хамовѣ)とは、次に言及される「カナンの一族」(Хананѣиско племя)すなわち「カナン人」を指している。ハム(ノアの息子)の息子カナン(『創世記』10:6)とその一族をのことである。

「セツの地(земля Сифова)に侵入した」「セツの一族からヘブライ人〔ユダヤ人〕が出ている(от племени бо Сифова суть еврѣи)」の「セツ(シフ)」は人祖アダムの子孫だが、先祖としては遠すぎて不自然であり、ここは「セム(Сим)」の誤記と解釈すべきではないか。実際、『トヴェーリ年代記』『ペレヤスラヴリ=スーズダリ年代記』『ニーコン年代記』等では、それぞれ земля Симова, племени Симова になっており、こちらの読みが本来のものだろう。

カナン人が「セムの地に侵入した」とは、典拠は不明だが、カナン人が、パレスチナの地中海沿いの低地であるいわゆる「カナン」に定住したことを指している。そして、セムの子孫であり、ユダヤ人(イスラエル人)の高祖であるアブハムが神によってカナンに呼ばれ、さらに一族がエジプトでの奴隷の境遇を経て、モーセによってカナンに帰り、その後、この地を占拠するに至ったこと(モーセ五書)を、「カナンの一族を滅ぼして自分の取り分と自分の地とを手に入れた」と言っているのではないか。

245) 「エサウ」(Исавъ)は、ユダヤの族長イサクの息子でヤコブの兄にあたる。弟ヤコブが奸策によって自分に代わって父イサクの祝福を受けたため、エサウは豊かな地を離れることになり、弟ヤコブを殺そうと願ったことは『創世記』27章に語られているが、エサウ自身が殺されたとは旧約聖書には記されていない。スラブ語の聖書外典「エサウの死」には次のような物語がある。「イサクがヤコブとエサウに兄弟が仲たがいしないように戒めて死んだが、エサウは息子アマレクにそそのかされて、弟ヤコブのところを攻め込んだ。ヤコブは城内に逃げ込むと、〈父の戒めを思い出すように〉と兄に言ったが、聞き入れられなかった。そこでヤコブは城壁の上からエサウに矢を射かけて殺した。これは、父イサクが予言した〈[エサウ]が自分の組から弟のくびきを外すだろう〉(『創世記』27:40)の成就である」。この箇所の出典は、おそらく『ゲオルギオス・モナコス(ハマルトロス)年代記』スラブ訳(Хроника Георгия Армагола)の第2書14章に引用されているこの物語[Книги Георгия Монаха 2006: С. 198]に拠ったものだろう。

【洞窟修道院の〔聖母就寝〕教会が定礎される：1073年】 [№ 214]

この年、洞窟修道院の教会の基礎が置かれた²⁴⁶⁾。典院フェオドーシイと主教ミハイル²⁴⁷⁾によってだった。

当時、府主教ゲオルギイ²⁴⁸⁾はギリシアにおり、スヴァトスラフ [C] がキエフに座していた²⁴⁹⁾。

[洞窟〔修道院〕の教会が典院フェオドーシイによって (Феодосомь) 定礎された²⁵⁰⁾ (заложена)]

【洞窟修道院典院フェオドーシイの死の物語（1）：悪鬼のそそのかしと齋戒についての教え：1074年】 [№ 215]

6782(1074)年

洞窟修道院の典院フェオドーシイが逝去した²⁵¹⁾。われらは少しかれの臨終 (успение) について物語ろう。

[6782(1074)年 洞窟〔修道院〕の典院フェオドーシイ (Федось) が逝去した。5月3日だった]

246) 『キエフ洞窟修道院聖者伝』(Киево-Печерский петерик)の「いつ洞窟の教会の基礎が置かれたかについて」と題された第3章に、Основана же бысть Божественаа сна церьки Богородичина в лѣте 6581(1073) (神聖な聖母の教会の基礎が置かれた)と対応する記述がある [БЛДР Т. 4: С. 304]。この「聖母教会」(святыя Богородица)とは、「聖母就寝」(Успение Богородицы)の祝祭に献堂された教会堂である。この章は「敬虔なる公スヴァトスラフ [C]のときに、この教会の建設 (здатися)が始まった。かれが自らの手で壕を掘ったのである」と続いており、キエフ公スヴァトスラフが定礎式に出席していたことが分かる。

なお、この記事は、フェオドーシイ自身による、いわゆる「定礎(закладка)」(場所を定め、土台になる礎石を置くこと)のことを指しているが、1074年5月にかれが没したことで作業は中断してしまった。ПВЛ 1075年記事によると、新たに洞窟修道院典院に選ばれたステファンが、この年に基礎造りを再開し、7月11日に基礎の建設を終えている。さらに、ПВЛ 1089年の記事で、聖母(就寝)教会は、「聖母教会の献堂式が行われた」(святыя Богородица освящена)とあることから、石造りの教会堂建設そのものは、1075年～1089年の14年もの間をかけて行われたことになる。

247) ユーリエフ主教ミハイルについては上注221を参照。次注のように府主教が不在だったため、その代行として定礎式に出席したのだろう。

248) 定礎式は教会規則によれば、キエフ府主教が執り行うべきだが、府主教だったゲオルギオスはちょうどコンスタンティノポリスへ戻ったばかりだったということ。上注218を参照。

249) この段落は上注234と同様に、出来事が起こった場所の「責任者」を明示しようとする意図による年代記記者による書き込みである。

250) *HI-C*のテキストでは、一般的な表現である заложити (定礎する)の語が用いられている。

251) フェオドーシイの死の時については*HI-C*に5月3日(1074年)とある。ПВЛには、「復活祭後の第2土曜日の午後の第2刻にかれは神の御手に魂を委ねた。5月3日、インディクトの11年であった」と詳細な記述がある。

フェオドーシイは習慣を持っていた。〔それは〕いつも²⁵²⁾、齋(ものいみ)の時が近づいたとき、〔すなわち〕乾酪週間の夕方に²⁵³⁾、習慣に従って兄弟〔修道士〕たちに接吻をして、かれらが齋の期間をどのように夜の祈りと昼の〔祈り〕によって過すべきか、誘惑者どものたくらみと悪鬼どものそそのかしから〔身を〕守るべきかについて、かれらに教えた。

〔フェオドーシイは言った。〕「悪鬼どもは修道士たちに、いたずらな考えや惑わしの欲望を植えつけ、かれらに思慮(помыслы)を押し付けます。これによってかれらの祈りは損なわれるのです。このような考えが浮かんで来たときには、十字架のしるしによってこれを制止して、こう言いなさい。〈主なるイエス・キリストよ、神の子よ²⁵⁴⁾、われらを憐れみ給え。アミン〉²⁵⁵⁾。またその上で、食物を摂り過ぎないように節制すべきです。沢山食べることや、度を過して飲むことによって、惑わしの考えが起るからです。惑わしの考えが起ると、罪を行うことになります」。

また〔フェオドーシイは〕言った。「悪鬼どもの働きかけとかれらのはかりごと(проньство)に抵抗しなさい。怠情から、眠り過ぎから〔身を〕守らなければなりません。気を張っていなさい。教会で聖歌を歌うときも、教父の伝統に拠って〔奉事する〕ときも、典礼書を朗読するときも。さらに、修道士たちは、[199] ダビデの聖詠〔詩篇〕を口にすべきです。これによって、悪鬼〔が吹き込んだ〕悲嘆(уныние)を追い払うことができるでしょう。さらになによりも、親愛を自分の中に持ちなさい。年少者は年長者に対して服従と従順の〔心を持ちなさい〕。年長者は年少者に対して親愛と教えの〔心を持ちなさい〕。自らを手本として示しなさい。節制によって、徹夜の祈祷によって、行進によって、その恭順によって。こうして年少者を教えなさい。教えて、かれらを慰めなさい。こうして、齋の期間を過ぎしなさい」。

また〔フェオドーシイは〕こう言った。「神は魂と肉体を浄化するために、この40日間をわれらに与えました。これは、一年のうち十分の一が、神に捧げられているということです。〔す

252) *Км* внегда; *Н1-М, ПВЛ* の他の写本にはない固有読み。

253) 「乾酪週間の夕方」(в недѣлю масленую в вечер)の「乾酪週間」(масляная неделя)はсыропустная неделя, сыропустная седмица とも言い、大齋(おおものいみ)直前の月曜日から日曜日の一週間のことを指している。この「夕方」は今流に言うとは乾酪週間の前日の日曜日の夕方だが、正教の一日は日の入りから始まることから、すでに乾酪週間に入ったばかりの時ということになる。なお、この日曜日はПрощенае воскресенье(赦しの主日)とも呼ばれ、古来の修道院の伝統では、信徒たちは自分が犯した罪の赦しを互いに求めるという慣習があった[Комментарии к ПВЛ 2012: С. 356]。

254) *Н1-М, С1* сыне Божии; *ПВЛ* Боже наш の異同がある。前者が本来的な読みと思われるが、確定的ではない。なお、この違いは、17世紀のモスクワ大公会議では神学的な問題として取り上げられるにいたるが、本テキストの異同には神学的な意味付けはないだろう(次注も参照)。

255) 原文は, Господи, Иисусе Христе, сыне божии, помилуй нас, аминь で、これは正教会で罪や試練に抗うときに広く唱えられている、いわゆる「イエスの祈り」(Иисусова молитва)の14世紀以前の古い形。

なわち], [ある] 年から [次の] 年まで 365 の日があります。それらの日々のうち、十番目の日を、十分の一の税 (десятина) として神に捧げなければなりません。それが 40 日間の齋²⁵⁶⁾ なのです²⁵⁷⁾。この日々に浄化された魂は、主の復活を輝かしく祝うのです。主のことを喜ぶのです。

齋戒の期間は人間の知性を浄化します。

精進 (пощение) の原型は太古にアダムにおいて原型が示されました。[アダムは] 最初、ある 1 本の樹から [実は] 食べなかったのです²⁵⁸⁾。モーセは、40 日のあいだ齋をして、シナイ山で律法を授けられ、神の栄光を見た²⁵⁹⁾ のですから²⁶⁰⁾。[サムエルの] 母は齋をしてサムエル (Самуил) を産みました²⁶¹⁾。ニネベ人は齋をして、神の怒りを免れました²⁶²⁾。ダニエルは齋をして、大いなる幻視を授けられました²⁶³⁾。エリヤは齋をして、天に挙げられたが、天国の食物に与りました²⁶⁴⁾。三人の若者は齋をして、炎の力を鎮めました²⁶⁵⁾。主は 40 日のあいだ齋をして、われらに齋

256) 正教の「大齋 (おおものいみ) (великий пост) は 40 日間であり、そのことを指している。

257) 以上の箇所は、移動祭日祈祷の注釈書である『シナクサリ』(Синаксарь в неделю сыропустную, воспоминание Адамова изгнания)に「次のことを知れ。この神聖にして大いなる 40 日の齋は、一年全体の十分の一であることを」(Вѣдомо же буди, яко десятина есть, сия святая и великая четыредьдесятница, всего лѣта)の一節があり、これを参照しているだろう。

258) 『創世記』2:17 の「善悪の知識の木からは決して食べてはならない」の神の禁止を指している。

259) 『出エジプト記』24:18 のモーセがシナイ山に登って、「モーセは 40 日、40 夜山にいた」を指している。

260) 移動祭日祈祷の注釈書である『シナクサリ』(Синаксарь в неделю сыропустную, воспоминание Адамова изгнания)には齋をテーマにした「アダムは食に与ったために違反者として楽園から追放され、モーセは齋で魂の眼を浄めて、神を見た人となった (…)」(Глазь б: Адамъ изъ рая отгонится, пищи причастився, яко преслушникъ. Моисей Боговидецъ бысть, постомъ очи душевныя очистивъ...)という一節がある。齋 (ものいみ) (пост) についての本記事は、このような典礼書の祈祷文を参照しながら、さらに展開して書かれたものだろう。

261) 『サムエル記上』1:20 の「ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル (その名は神) と名付けた」の箇所を指している。ただし、聖書にサムエルの母ハンナが齋をしたという記述はない。

262) 『ヨナ書』3:5-10 の「ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ (… 神は宣告した災いをくださすのをやめた」の部分」を指している。

263) 『ダニエル書』1:12-17 の、ダニエルを含む四人の王の世話係に「どうかわたしたちを十日間試してください。その間、食べるものは野菜だけ、飲むものは水だけにさせて下さい」と言ったエピソードを指している。

264) エリヤが「齋をして、天国の食物に与った」(постився... в пищу породную)とは、『列王記上』第 19 章 1-8 のエピソードを参照。エリヤが天に挙げられたことについては『列王記下』第 2 章を参照。

265) 三人の少年は、『ダニエル書』第 3 章に登場するシャドラク、メシャク、アベド・ネゴ (ギリシア語、スラブ語訳ではハナニヤ、アザルヤ、ミシャエル) の 3 人を指している。ただし齋 (пост) についての言及はこの部分にはない。

戒の期間を示しました²⁶⁶。使徒たちは齋によって、悪鬼どもの教えを根絶しました²⁶⁷。われらの師父たちは齋によって灯明のようにこの世に現われ、それ〔灯明〕は死後も輝いています。かれらは大いなる働きと節制を教えてくださいました。見よ、それは、大アントニオス、エウテュミオス、サバス²⁶⁸やその他の師父たちであり、われらは、かれらに倣おうとしているのです、兄弟たちよ」。

かれ〔フェオドーシイ〕は、このように兄弟修道士たちに教え、全員に接吻をして、かれら一人一人の名を言った。

こうして、〔フェオドーシイは〕修道院から退去した²⁶⁹。わずかなパンとデイル²⁷⁰ (укрух) を手にしただけだった。そして再び洞窟に入り、洞窟の扉を閉め、土でこれを塞いで、誰とも口をきかなくなった。〔200〕

もし誰かが、必要な用事があれば、小さな窓越しに言葉を交わした。それは、土曜日か日曜日であった。その他の日には、齋と祈りのうちにあり、厳しく節制を守っていた。

〔フェオドーシイは〕ラザロの日の前夜、金曜日に修道院に戻って来た²⁷¹。その日に40日の齋戒が終わったからである。〔40日の齋戒は〕テオドロスの週²⁷²の始まる最初の月曜日に始められ、ラザロの金曜日に終る。受難週間 (страстная неделя) は主の受難のために齋をするように定められている。

【洞窟修道院典院フェオドーシイの死の物語（2）：発病後次の典院を選び、スヴァトスラフ公に修道院の庇護を委ねる】 [№ 216]

フェオドーシイは戻ってきて、兄弟修道士たちに接吻し、〔奉事規定の〕決まり通りにか

266) 『マタイによる福音書』4:2 にイエスが「40日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えた」とあることを指している。

267) 『使徒言行録』13:2-3 には、サウロ (パウロ) の断食について記されている。

268) 「大アントニオス」(великий Антоний), 「エウテュミオス」(Еуфимий), 「サバス」(Сава) は3～6世紀の修道院創建者の聖人で、フェオドーシイにとっては生活と修行の手本となる教父たちだった。

269) 文脈から見て (下注 272 参照)、フェオドーシイが修道院舎を離れて洞窟に籠ったのは、大齋 (おおものいみ) が始まる、1074年3月3日の月曜日、テオドロスの週の始まりの日のことと考えられる。

270) 次の異読がある。Км взимая мало хлѣба, единь укрух; Ак, Бр взимая мало ковригъ, ПВЛ взимая мало коврижекъ/коврижець。ПВЛの読みが本来で、Кмは解釈的な固有読み。なお、ковриг/коврижекは丸く焼いたパンのこと。「デイル」укрух, укропは、セリ科の草で「ヒメウイキョウ」(姫茴香) とよばれることがある。全体に芳香があり薬草としても用いられる。

271) 正教会の暦では、ラザロの日 (Лазаревъ день) は常に土曜日で、この日が40日の大齋 (おおものいみ) が終わる日とされている。1074年のラザロの日は4月12日で、前日の金曜日は4月11日に相当する。

272) 「テオドロスの週」は大齋 (おおものいみ) の週の名称で、この週の始まり (月曜日) が開始の日になる (上注 269 参照)。

れらと花の主日〔聖枝祭〕²⁷³⁾ (недѣля цвѣтная) を祝った。復活の大いなる日²⁷⁴⁾ (великий днь въскресенія) になると、かれは〔奉事規定の〕決まり通りに²⁷⁵⁾ 輝かしく祝祭〔の奉事を〕行った。そして、〔その翌日〕病に倒れたのである。

〔フェオドーシイは〕病気になって5日間病に伏せった²⁷⁶⁾。その後、夕方になると²⁷⁷⁾、自分を中庭に運び出すように命じた。兄弟修道士たちは、かれを担架に乗せ、運び出して²⁷⁸⁾、教会のすぐ前に置いた。かれは兄弟修道士たちを全員呼び集めるよう命じた。兄弟修道士たちはそこに整列した。板木(ばんぎ)(било)が打たれたのである。すぐに、すべての兄弟修道士たちが集まった。

〔フェオドーシイは〕かれらに言った。「わが兄弟たちよ、わが父たちよ、わが子どもたちよ。今、わたしは、あなたたちのもとから去ろうとしています。齋戒の期間、わたしが洞窟にいたとき、主はわたしに、この世を去らねばならないことを示したのです。さて、あなたたちは、誰を自分たちの典院(игумень)にしたいと思いますか。貧しいわたしは、その者に祝福を与えましょう」。

かれらは、かれ〔フェオドーシイに〕言った。「あなたはわれら全員にとっての父です。ですから、もしあなた自身が、誰かを望まれるなら、その者がわれらの父となり、典院になるでしょう。われらはあなたと同じように、その者に聞き従うでしょう」。

われらの父フェオドーシイは言った。「わたしのいないところに行つて、²⁷⁹⁾ 最年長の者から

273) 「花の主日」と訳した原文は、недѣля цвѣтная。цветная (цветносная) неделя とは復活祭一週間前の主日(日曜日)、すなわち「聖枝祭」(Неделя ваий, вербное воскресенье) の別称。1074年の「聖枝祭」は、ラザロの日の土曜日の翌日で、4月13日に相当する。

274) 「復活の大いなる日」(великий днь въскресенія) は、正教のもっとも重要な祭りである、いわゆる「復活大祭(パスハ)」(Пасха) のこと。1074年の「復活大祭」は4月20日の主日(日曜日)に当たっている。

275) ここで「(奉事規定の) 決まり通りに」(по обычаю) の句が二度繰り返されているのは、フェオドーシイが死の直前であっても、奉事を省略せずに規定(типикон)に定められた通り行ったことを強調するためと考えられる。

276) 4月21日から4月25日までの5日間のことを指している。

277) 現代の考え方で、4月25日の金曜日の日没が終わってすぐの頃(当時の教会暦の考え方では、4月26日が始まってすぐ)を指している。

278) 次の異読がある。Км вземши носило и изнесъши; Ак, Бр изнесше; ПВЛ вземше и на сани/санех; СІ вземше на санехъ. ПВЛの読みの、橇(сани)でフェオドーシイを運んだのは、当時の葬礼儀式に則ったものであり[Комментарии к ПВЛ 1950: С. 433-434]、このПВЛの読みが本来のものだろう。НІ-Мの読みはこの古い葬礼が理解できなかった編者による改変と考えられる。

279) この箇所、ПВЛでは「二人の兄弟修道士、ニコラとイグナトを除いて、あなたたちが望む者」(кромѣ двою брату, Николю и Игнага; в прочихъ кого хошете)の文言があるが、НІ-М全写本で省かれている。НІ-Мの編者はフェオドーシイが典院候補者として二人を除外した真意が分からなかったために削除したと考えられる。なお、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の後代の版には、ニコラという修道士が同僚の修道士が信者から預かったお金を盗んだ話があることから[Киево-Печерский патерик 1900: С. 125-126][Cross 1953: p. 268, n. 235]、当時、かれは懲罰を受けていたのかもしれない。おそらくイグナトも同様の立場だったのか。

最年少の者に至るまでのうち、あなたたちが望む人を指名しなさい」。

かれらは、かれ〔フェオドーシイ〕の言うことに聞き従って、少し教会の方へと下がると、相談した。〔そして〕二人の兄弟修道士たちを〔フェオドーシイのもとに〕遣って、こう言った。「神とあなたの尊い祈りが選ぶ者を、あなたがよいと思う者をわれらに指名して下さい」。

フェオドーシイは、かれらに言った。「もしあなたたちが、わたしから典院を受け入れたいのなら、自分の意思によってではなく、神の御心によって、わたしは〔あなたたちに指名を〕行おう」。

そして、〔フェオドーシイは〕かれらに長老司祭ヤコフ (прозви́тер Яков) を指名した。[201] 兄弟修道士たちはこれを気に入らなかった。そして、こう言った。「かれは、ここで剃髪した者ではありません」。ヤコフは、自分の兄弟パーヴェルとともに、遠くから²⁸⁰⁾ から来たからである。兄弟修道士たちは、当時聖歌隊長²⁸¹⁾ (демественик) で、フェオドーシイの弟子ですべての習慣において善良、温順、静かで謙抑な人物²⁸²⁾ のステファン²⁸³⁾ (Стефанъ) を〔指名するように〕願い始めた。そして、こう言った。「この人はあなたの手もとで育ち、あなたのもとで仕えてきた人です。この人をわれらに〔指名して〕与えて下さい」。

フェオドーシイは、かれらに言った。「わたしは神の命によってヤコフを指名したのに、あなたたちは自分の意志を通そうとしているではないか」。

しかし、かれ〔フェオドーシイ〕は、かれらの言うことを聞いて、かれらの典院となるようにステファンをかれらに委ね、ステファンを祝福して、かれに言った。「子よ、わたしは修道院をあなたに委ねます。安らかに²⁸⁴⁾ それ〔修道院〕を守りなさい。奉事のときには、わたしが定めたことを守りなさい。修道院が伝えて来たことを、教会法規(устав)を変更しないように。律法(закон)と修道院の規律(чин монастырьск)に従ってすべてを行いなさい」。

この後、兄弟修道士たちはかれを持ち上げて、僧坊に運び、寝床の上に寝かせた。〔それか

280) 「遠くから」は *Н1-М* 全写本で *издалеча* だが、*ПВЛ* では с Летьца (レチツァから) になっている。「レチツァ」Льтиця, Ильтиця はベレヤスラヴリ近郊のアリタ川(Альта) (上注3) の別称。この異読は、*Н1-М* 編者が地名を理解できず普通名詞に書き換えたことによる、後代の改変と考えられる。

281) 聖歌隊長(демественик) は、ギリシア語 *δομῆστικος* の音写語で *доместик*, *деместик*, *дамаственик* などとも綴られる。毎日の奉事の手順を心得て、聖歌隊を主導する重要な役割だった。

282) 「すべての習慣において善良、温順、静かで謙抑な人物」(му́жа по всему обычаемъ блага и кротка, тиха и смирена иже) は *Км* のみの個別読み。

283) 「ステファン」(Стефан) は、フェオドーシイの祝福を受けて1074年に洞窟修道院の典院(院長)になるが、1078年に修道院を去り、近くにクロフ修道院(Кловский монастырь)を創建した。1090年にはヴラジミル=ヴォルィンスキイの主教に叙任され、1094年に没している。

284) ここは、*Н1-М* *блуди съ спасением его* (安らかに守れ) ; *ПВЛ* *блуди съ опасением его* (注意して守れ) の異読がある。内容や表現の文脈の自然さから見て、*ПВЛ* が本来の読みと考えられる。

ら] 6日目になり²⁸⁵⁾, 病気が知られるようになり²⁸⁶⁾, スヴャトスラフ (Святославъ)[C]が自分の息子グレーブ (Глѣбъ)[C1]を伴ってかれのもとへやって来た。[二人が] かれのそばに座ると、フオドシーイは、かれ [スヴャトスラフ] にこう言った。「見よ、わたしはいまこの世から去ろうとしています。見よ、もしここ [修道院] で混乱が起こったときには、わたしはあなたに、修道院の保護を委ねます。見よ、わたしは典院の職をステファンに任せます。どうか、かれに侮辱を与えないようにして下さい」。

スヴャトスラフ公は自分の息子グレーブとともに²⁸⁷⁾, すぐに、聖なる長老に²⁸⁸⁾ 接吻し、修道院に心を配ることを約束した²⁸⁹⁾。

285) 4月26日から起算して(上注277)6日目、すなわち1074年5月1日のこと。なお、本年代記のフェオドーシーイ逝去の記事は中断しているが、*ПВЛ*に記されている続きの記事によれば、7日目(5月2日)にフェオドーシーイはステファンと修道士たちを呼んで修道院の運営について最期の言葉を伝え、8日目である5月3日土曜日の「第2時」(в час 2 дне)(午前7時から8時頃)に没している。

286) 「病気が知られるようになり」(болну сущу вѣдому)は*Н1-М*, *С1*の読みだが、*ПВЛ*では болну сущю велми(病気が重くなったとき)の異読がある。どちらが本来の読みであるかは定めがたい。

287) 「スヴャトスラフ公は自分の息子グレーブとともに」(князь Святославъ и съ сыномъ своимъ Глѣбомъ)の句は*Км*のみの個別読み。

288) 「聖なる長老に」(святого старца)は*Км*のみの個別読みで、*Ак*, *Бр*, *ПВЛ*は его(かれに)となっている。

289) フェオドーシーイの臨終の物語は、*Н1-М*ではここで中断しているが、*ПВЛ*では引き続いてかれの逝去が描写され、さらに、キエフ洞窟修道院の修道士たちの列伝が置かれている。

参考文献

- Абрамович 1916 — Абрамович Д. И. Жития святых мучеников Бориса и Глеба и службы им. Пг., 1916.
- Аничков 1914 — Аничков Е. В. Язычество и Древняя Русь. СПб., 1914.
- Баженова 2006 — Баженова А. Славян родные имена: Словарь исторических родокоренных имен и прозваний славян и русов за два тысячелетия. М., 2006.
- БЛДР Т. 1 — Библиотека литературы Древней Руси. СПб., 1997, Т. 1: XI–XII вв.
- БЛДР Т. 4 — Библиотека литературы Древней Руси. СПб., 1997, Т. 4: XII век.
- Бобров 2004 — Бобров А. Г. Древнерусская «мовь» // Труды Отдела древнерусской литературы. СПб., 2004. Т. 56. С. 94–120.
- ВМЧ Сент. 25-30 — Великие Минеи Чети. Сентябрь дни 25-30. СПб., 1883.
- Воронин 1960 — Воронин Н. Н. Медвежий культ в Верхнем Поволжье в XI веке // Краеведческие записки Ярославско-Ростовского историко-архитектурного заповедника. Ярославль, 1960. Вып. IV. С. 48-62.
- Гальковский 1916 — Гальковский М. Н. Борьба христианства с остатками язычества в Древней Руси. Том 1 М., 1916.
- Гимон 2013 — Гимон Т.В. Янь Вышатич и устные источники древнерусской Начальной летописи // Древнейшие государства Восточной Европы, 2011 год: Устная традиция в письменном тексте. М., 2013. С. 65–117.
- Гиппиус 2002 — Гиппиус А.А. Янь Вышатич и волхвы: «уроки церковнославянского» (Лингвосомиотический комментарий к Начальной летописи) // Семиотика и информатика: Сборник научных статей. М., 2002. Вып. 37. С. 16–42.
- Даль 1984, Т. 2 — Даль В. И. Пословицы русского народа в 2 томах. Т. 2. М., 1984.
- Закревский 1858 — Закревский Н. Летопись и описание города Киева. Ч. 1-2, 1858.
- Закревский Планы — Планы к Описанию Киева (Закревский Н. Описание Киева Т. 1-2, М., 1868.
- Истрин 1920 — Истрин В.М. Книги временья и образия Георгия Мниха. Хроника Георгия Амартола в древнем славяно-русском переводе. Т. 1: Текст. Пг., 1920
- Карпов А.В. 2016 — Карпов А.В. «Очерки мордвы» П.И. Мельникова и проблема этнической интерпретации «восстания волхвов» (1071 г.) // Universum: Общественные науки: электрон. научн. журн. 2016. № 12(30). URL: <http://7universum.com/ru/social/archive/item/4110>
- Карпов 2017 — Карпов А. Ю. Русская церковь X-XIII вв.: Биографический словарь. М., 2017.
- Киево-Печерский патерик 1900 — Киево-Печерский патерик. Полное собрание житий святых в Киево-Печерской Лавре подвизавшихся. М., 1900.
- Ключевский Курс 1 — Ключевский В. О. Сочинения Т. 1: Курс русской истории 1. М., 1987.
- Комментарии к ПВЛ 1950 — Повесть временных лет. Ч. 2. Приложения / Статьи и коммент. Д.С. Лихачева; Под ред. В.П. Адриановой-Перетц; Ред. изд-ва А.А. Воробьева. М.; Л., 1950. С. 203–484.
- Комментарии к ПВЛ 2012 — Повесть временных лет / Пер. с древнерусского Д. С. Лихачева, О. В. Творогова. Коммент. А. Г. Боброва, С. Л. Николаева, А. Ю. Чернова при участии А. М. Введенского и Л. В. Войтовича. СПб., 2012. С. 183–380.
- Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.
- Литвина, Успенский 2013а — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. К уточнению семантики древнерусского «свататися» / «сватитися» и «сват(ь)ство» (Историко-филологический этюд) //

- Die Welt der Slaven LVIII, 2013, 308-325.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К., 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Лихачев 1986 (1945) — Лихачев Д. С. Лихачев Д.С. «Устные летописи» в составе Повести временных лет. // Лихачев Д. С. Исследования по древнерусской литературе. Л., 1986. С. С. 113-136. (Исторические записки. М., 1945, Т. 17, с. 201–224).
- Мавродин 2002 (1940) — Мавродин В. В. Очерки истории Левобережной Украины (с древнейших времен до второй половины XIV века). СПб. 2002.
- Книги Георгия Монаха 2006 — Матвеев В., Щеголева Л. Книги временные и образные Георгия Монаха. В двух томах. Т. 1, Ч. 1.: Интерпретированный текст Троицкой рукописи. М., 2006.
- Милтенев 2013 — Милтенев, Явор. Златоструй: старобългарски хомилетичен свод, създаден по инициатива на българския цар Симеон. Текстологическо и извороведско изследване. София: Авалон, 2013, 552 с.
- Милтенев 2017 — Милтенев, Явор. Слово за засухата и Божиите наказания – текстологическо и извороведско изследване // Известия на Института за български език (ИБЕ), кн. XXX, 2017. с. 214–261.
- Михеев 2011 — Михеев С. М. Кто писал «Повесть временных лет»? М., 2011.
- Михельсон 2006 — Михельсон М. И. Толковый словарь иностранных слов, пословиц и поговорок. М., 2006.
- НГБ XI — Янин В. Л., Зализняк А. А., Гиппиус А. А. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1997–2000 гг.). М., 2004.
- Оболенский 1998 — Оболенский Д. Византийское содружество наций. Шесть византийских портретов. М. 1998.
- Палея Толковая 1892 — Палея толковая. По списку, сделанному в Коломне в 1406 г. Труд учеников Н. С. Тихомирова. М., 1892.
- Петрухин 2000 — Петрухин В. Я. Древняя Русь : Народ. Князь. Религия // Из истории русской культуры. М., 2000. Т. I : (Древняя Русь). С. 13–410.
- Поппэ 1995 — Поппэ А. О зарождении культа святых Бориса и Глеба и о посвященных им произведениях // *Russia Mediaevalis* T. VIII. № 1. Munchen, 1995.
- ПСРЛ Т. 1 — Лаврентьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том первый). М., 1997.
- ПСРЛ Т. 9 — Полное собрание русских летописей: Том 9, Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью. М., 2000.
- Рапов 1977 — Рапов О. М. Княжеские владения на Руси в X — первой половине XIII в. М., 1977.
- Рапов 1979 — Рапов О. М. О датировке народных восстаний на Руси XI века в Повести временных лет // *История СССР*. 1979, № 2. С. 137–150.
- Свердлов 1996 — Свердлов М. Б. Дополнения // *Повесть временных лет*. СПб., 1996. Изд. 2-е, испр. и доп. (серия «Литературные памятники»). С. 584-665.
- Срезневский Сведения 1867 — Срезневский И.И. Сведения и заметки о малоизвестных и неизвестных памятниках. I-XL. М., 1867.
- Ужанков 2000 — Ужанков Л. Н. Святые страстотерпы Борис и Глеб: К истории канонизации и написания житий // *Древняя Русь: Вопрос медиевистики*. М., 2000. № 2. С. 28-50.
- Ужанков 2001 — Ужанков Л. Н. Святые страстотерпы Борис и Глеб: К истории канонизации и написания житий // *Древняя Русь: Вопр. медиевистики*. 2001. № 1(3). С. 37-49.

- Франко 1902 — Франко І. Я. Апокрифи і легенди з українських рукописів. Т. 3: Апокрифи новозавітні: Б.Апокрифічні діяння апостолів / зібрав, упорядкував і пояснив І. Франко. Львів, 1902.
- Фроянов 2012 — Фроянов И.Я. Древняя Русь IX-XIII веков. Народные движения. Княжеская и вечева власть. М., 2012.
- Чаговец 1901 — Чаговец В. А. Преподобный Феодосий Печерский, его жизнь и сочинения. Киев, 1901.
- Черепнин 1965 — Черепнин Л. В. Общественно-политические отношения в Древней Руси и Русская Правда // Древнерусское государство и его международное значение. М., 1965.
- Шахматов 1940 — Шахматов А. А. Повесть временных лет и ее источники // Труды Отдела древнерусской литературы. Т. 40, 1940. С. 9–150.
- Шахматов 2002 (1908) — Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 1: Разыскания о древнейших русских летописных сводах. СПб., 2002. (текст "Разысканий о древнейших русских летописных сводах" публикуется по изданию 1908 г.)
- Шахматов 2003 (1947) — Шахматов А. А. Киевский Начальный свод 1095 // Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 2: Раннее русское летописание XI—XII вв. СПб., 2003. С. 428—464 (А. А. Шахматов. 1864-1920. Сборник статей и материалов. М.; Л., 1947. С. 117—160).
- Щавелева 2004 — Щавелева Н. И. Древняя Русь в «Польской истории» Яна Длугоша (книги I–VI): Текст, перевод, комментарий. М., 2004.
- ЭССЯ Вып. 10 — Этимологический словарь славянских языков. Праславянский лексический фонд. Вып. 10. М., 1983.

Cross 1953 — Cross & Sherbovitz-Wetzor. The Russian Primary Chronicle 1953.

IPSB — IPSB (INTERNETOWY POLSKI SŁOWNIK BIOGRAFICZNY) <http://ipsb.nina.gov.pl/Home>

栗生沢 2015 — 栗生沢猛夫『〈ロシア原初年代記〉を読む』, 成文社, 2015年。

佐野 2008 — 佐野洋子『ロシアの神話 — 自然に息づく精霊たち』(三弥井書店, 2008年)

※ 年代記とその写本の略号については, [ノヴゴロド第一年代記(1): 212-213頁]を参照。

〔後記〕

本稿は共同研究『『ノヴゴロド第一年代記』講読会』の研究活動の成果である。講読会の参加者は次の通り。宮野裕(岐阜聖徳学園大学教育学部教授), 岡本崇男(神戸市外国語大学名誉教授), 今村栄一(テルメズ国立大学歴史学部講師), 草加千鶴(創価大学非常勤講師), 伊丹聡一郎(明治大学大学院博士後期課程), 岸慎一郎(塾講師)。

本稿は, 2022年度JSPS科研費, 基盤研究(C)「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」(19K00469, 研究代表者:中澤敦夫, 研究分担者:宮野裕, 岡本崇男)の助成を受けて行われた研究に基づいている。

